菱田海鷗と大垣詩壇（二）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10936

明治大学教養論集　通巻四五〇号　（二〇一〇・一）八五―一五〇頁

菱田海鷗と大垣詩壇（二）

徳田　武

本稿は『明治大学教養論集』通巻四四七号「菱田海鷗と大垣詩壇」を承けるものである。

十六　艮斎塾放逐

安政六年（一八五九）は、海鷗が二十四歳、鉄心が四十三歳の年である。

二月一日は、晴れて暖い日であったが、その午後、海鷗は、小原鉄心・上田高痴・野村藤陰・宮本翠迂とともに広尾まで散策した。藤陰に、「二月朔、晴暄、春意頗る佳し。午後、鉄心大夫・高痴君及び翠迂・海鷗の諸兄と同に、広尾邸に至る」（『遺稿』一）がある。広尾は、今の渋谷区広尾町のあたりであろうが、一帯には大名の別荘が多かった。だから広尾邸とは、藩主戸田氏の別荘をいうのであろう。詩は、次のようなものである。

此身従落軟塵間　此の身　軟塵の間に落ちてより
不見烟螺半碧山　烟螺半碧の山を見ず
散策偶然出城去　散策　偶然に　城を出で去り

溪雲野鶴与心閒　溪雲　野鶴　心と閒なり

私の身が大都会の喧騒に埋没してからは、
もやに包まれて、うねくと延びた青山を見た事がない。
散歩に出て、たまたま城外のここに出て来たが、
川の上に浮かぶ雲や野原の鶴を見ていると、心までゆったりとする。

その当時には武蔵野の野趣をたたえていた広尾の草原に立って、かなたの青山を眺めている海鷗たちの姿が髣髴とするのである。

二月十一日、鉄心は、高島秋帆・大槻磐渓・春木南華・野村藤陰とともに、舟を浮かべて深川に到った。折しも海鷗と上田高痴・竹内某・小野崎立堂・桑山某・江馬金粟も、舟を傭って来あわせた。鉄心の詩に、「二月十一日、秋帆・磐渓・南華・藤陰と同に舟を泛べて深川に到る。上田・竹内・小野崎・桑山・江馬・菱田の諸子も亦た舟を買ひて尋いで至る。興趣益す旺なり。此の日、初め雨にして後晴る。五絶句を得たり」（『遺稿』四）とあり、藤陰詩に「二月十一日、鉄心大夫、高嶋秋帆・大槻磐渓・春木南華を訪ひ、舟を泛べて留潮橋より州崎に至る。余も亦た陪す焉。高痴君、立堂・藤渠・海鷗の諸子を拉して、別に舟を泛べて続き至る。舟中に五絶句を賦して以て盛遊を紀す。三を録す」とある。かくて鉄心と海鷗たちは、豪興を尽す事になるのであるが、この日の模様は、鉄心の『飲夢編』（明治十二年刊）に詳しく述べられている。それを訓読してみよう。

一日、風雨甚だ暴なり。意に謂へらく、奇遊は今日に在りと。乃ち詞友若干名を遣して、先に宴を深川の飛鸞楼に張らしめ、又た一介を馳せて、秋帆・磐渓二翁に檄して曰く、「速かに留潮橋に会せよ」と。余、先に至りて舟を艤す。二翁継ぎて至り、相顧みて曰く、「大夫に計有るか」と。余曰く、「有り焉。霪雨開かず、陰風怒号す。豈時を憂ふるの士の、感極まりて志を発する者無からんや。是の時に於て、舟を芝浦に泛べ、濁浪空を排し、雄岳形を潜むるの状を観て、以て快飲を為す。是れ計の得たる者に非ずして何ぞや」と。二翁、唖然として舟に入る。纜を解きて東し、乃ち太白を挙げて相属し、酔興大いに発す。舟、始めて海口に出づ。鷲涛山のごと立ち舟殆ど覆らんとす。余、舵頭に坐し、気を作して飲む。然れども終に進むべからず。艫を転じて北し、深川に抵り、遥かに飛鸞楼を望む。人有り手を拍ちて絶叫す。漸く近づけば則ち余が文墨の友なり。期せずして相会する者の如し。紅袖座を囲み、糸竹争ひ奏す。觴を飛ばして痛飲すれば、興趣忽ち旺なり。時に海鷗、湯に別室に浴す。春南華、其の褌襠を展げ、戯れに梅花を画く。磐翁、即ち筆を奪ひ之に賛して曰く、「昔者、劉隆準（邦）、腐儒の冠を解き、其の中に溲溺す。既已に快事と為す。今、書生の犢鼻褌を解き、筆を奮って梅花を一掃し、此を以て醜夷の醒羶の気を防げば、洵に千古の大快挙と為さん矣。抑も小西行長、薬戸の巨紙嚢を掲げて、以て韓を征す。今試みに此の褌を以て章旗と為し、醜夷の域中に横行すれば、則ち其の快たる果して如何ぞや」と。一座、之を観て絶倒し、興も亦た此に至りて奇極まれり矣。

既にして天晴れ、夕陽、簾に在り。皆、楼を下り舟に入る。舟、永代橋に抵る。春潮、月を湧かし、金波揺曳、向の鷲涛山立なる者に視ぶれば、別に一天地を開く者の如し。嗚呼、是の遊や、奇を以て功を奏す。此に至りて自ら凱旋の想有り矣。

右の『飲夢編』の記述を、安政六年二月十一日の事と定める理由は、一に、場所と日程・天候とが鉄心や藤陰の言

うところと一致する点に在る。鉄心の五絶句には、第一首に「芝浦驚濤」、第二首に「深川細雨」、第三首に「鸞楼春宴」、第四首に「州崎（深川に隣接）晩潮」、第五首に「永代新月」と副題されているが、それは『飲夢編』の「芝浦…驚涛」、「深川」、「飛鸞楼」の宴、「永代橋…春潮湧月」という場所と日程および天候と一致するのである。二に、鉄心や藤陰の詩題に挙げられている人物の名が『飲夢編』の右の記述中に挙げられている人名と一致する点に在る。もっとも『飲夢篇』には、秋帆・盤翁・海鷗・南華の四人の名しか挙げられていないが、その四人はすべて一致するのである。

かくして、『飲夢編』の右の記述は、安政六年二月十一日の遊びを記録したもの、と言えるであろう。そうとすると、彼らの一見馬鹿げた遊びの裏には、攘夷の気分や、日章旗の制定への反抗の気分が含まれている事が明らかになってくる。海鷗の褌に南華が梅花を画いたのまでは、悪ふざけに属する。だが、盤渓が、その事をもって、「防醜夷醒羶之気」と意味づけるのは、勿論冗談であるにしても、そこに一抹の洋夷への憎悪の気分が揺曳している事は、否定できない。また、小西行長の顰に倣って、褌を「章旗」として「横行醜夷之域中」する事には、この年の一月、幕府が諸藩に日の丸の旗を掲げて日本船の印とするのを許可した事を揶揄する、という意味あいが込められていよう。そして、その事は更に、西欧諸国とやたらに通商条約の調印を行う幕府のやり方への皮肉や憤懣の現われ、と言う事もできよう。だからこそ一座は、「絶倒」したのである。このように、鉄心や海鷗たちの悪ふざけには、時勢や幕政への鬱憤を晴らそう、という一面も幾分かは孕まれていたのである。こうして海鷗の犢鼻褌は日章旗にまでなったのであるが、この事に就いて海鷗は評して、

余が裩、一は南華の妙画を経、二は盤翁の奇筆に上る、三は大夫の名文に入る。千古の奇裩と謂ふべし矣。此の裩一たび出づれば、阮家の裩、頓に色無からん。好笑〳〵。

と言う。阮家の褌とは、魏の阮咸が、七月七日、衣をさらす風習の際、犢鼻褌をさらして済ましていた、という故事（『世説新語』任誕）を指して言ったもの。

さて、藤陰は、詩題にも言うように三首の詩を録しているのであるが、その第一首は次のようなものである。

留潮橋畔買軽舟　留潮橋畔に軽舟を買ふ
春水拖藍鷗影浮　春水　藍を拖（ひ）き　鷗影浮かぶ
名士兼同名妓載　名士　兼ねて名妓と同（とも）に載り
豪都麗勝侭（ことごと）風流　豪都　麗勝　侭（ことごと）く風流

汐留（しおどめ）橋のあたりで、足の早い舟を頼んだ。
春の川水は藍色を帯び、白い鷗の姿が映る。
名のある人士たちが名高い藝者と一緒に乗船し、
繁栄する江戸の景勝の地で風流を尽くす。

右の詩の転句では、妓女が同船している事を言う。鉄心詩の第三首の転句にも、「飛鸞楼上美人の酒」と、妓女の存在を言う。前にも述べたが、大垣藩家老たる鉄心が催す宴は、安い飲み屋での粗末な物ではない。繁華な深川の高級料亭における、紅袖に囲まれた豪遊である。だから、平生は質素な生活を送らざるを得ない儒者たちが、鉄心の招宴に加った時には、豪奢なお大尽の遊びができる。藤陰が「平生の寒乞の相を換却して、軟糸脆竹嬉娥に酔ふ」（第二首の転結句）と詠うのは、かような意味である。若くして、このような鉄心の招宴にいつも与っていた海鷗が、花柳界

の艶女たちと馴染まない筈がない。そして馴染めば、艶女のために華麗な衣裳を造ってやる、という仕儀になる。鉄心にかわいがられていた海鷗には、それを可能にする資金もあったのであろう。

しかし、そのような派手な事を行うと、貧書生が多い塾の内では、羨望と嫉妬に由来する憎しみを買う。そうなると、漢学書生であるだけに、そのような憎しみを道学のオブラートに包んで、倫理道徳をもって正面から非難してくる。艮斎塾の書生たちも、果してそうであった。海鷗の潤沢と艶福とを心よく思わなかった同門の徒は、一斉に彼を指弾した。この間の事情が、岡鹿門の『在臆話記』第三集巻三には、

菱田文蔵ヲ訪フ。文蔵、海鷗ト号。見山楼ニ在ル、踊子師匠ガ観花開筵ニ服装ヲ新製贈遺セシニ、挙塾排斥、此事ノ為メ放逐、鉄心ノ幕臣タリ。

と記されている。「観花開筵」とは、陰暦ならば、二・三月の交に行われるであろうが、右の排斥事件が真実であるとすれば、それは二月十一日の遊興から程ない頃に起ったもの、と考えられる。

真実であるとすれば、と一応保留はしたが、やはり真実であるのであろう。と言うのは、鴻雪爪が鉄心の「濃中社友小伝」に月旦を加えた文が『山高水長図説』上にあるが、海鷗については、

海翁、余より少きこと二十歳、意気相投ず。月瀬の探梅、養老の観瀑、皆偕にす焉。性、風情（恋愛の情）多し。屢ば俗士の議する所と為る。余、鉄心と曾て之を惜む。今や索居して、近状を知らず。然れども牛相（牛僧孺。杜牧の庇護者。鉄心を言う）にして在らば、樊川（杜牧。海鷗を言う）の才を棄てざらん。

（依田）学海曰く、海鷗、気宇磊落、毫も修飾せざる処、海鷗たる所以なり。（原漢文）

と言っているからである。「性多風情、屢為俗士所議」とは、まったく艮斎塾における排斥事件に該当する人物評ではないか。

こうして海鷗は、安政六年三月頃に、艮斎塾を退学したもの、と考えられる。

十七　帰国

艮斎塾を放逐された海鷗は、間もなく江戸を立って、大垣に帰るのであるが、それは、安政六年五月頃、と考えられる。と言うのは、『藤陰遺稿』を検するに、前引した「二月十一日……」詩の次に「(小野崎) 立堂の郷に帰るを送る」があり、その転句に「芳草落花春又た暮る」とあるから、それは、三月末の事、と考えられる。そして、その次に「雨に坐して月を得たり」という七絶が置かれる。また、その次には、「別後、懐を鉄心大夫及び謙斎・立堂・海鷗の諸君に寄す」が配され、その次に「六月念六日、江戸を発し途を木曾に取りて郷に帰る。途上に十絶句を得たり」が配されている。そうとすると、海鷗の帰郷は、大体、四月から六月末までの中間と考えられるので、右のように策定したのである。この時には小原鉄心も帰国したようで、『鉄心遺稿』四にも、「二月十一日……」詩から程近い所に「将に都を発せんとして、此を賦し諸友に留別す」があり、その末句に「新鵑一たび叫びて雨は糸の如し」とあるから、時期はやはり、陰暦の五月頃であったようだ。但し、後述するように、海鷗の方が鉄心より一足遅く到着したようである。

海鷗の帰国に際して、野村藤陰は、七律「送菱海鷗帰郷」を詠じたが、それはいかにもよく海鷗の人となりを伝えている。

把佗富貴等雲烟　佗(か)の富貴を把りて　雲烟に等しくし
擲尽千金荅少年　千金を擲尽して　少年に荅(こた)ふ

境比秦淮更佳麗　境は秦淮に比して　更に佳麗
身同杜牧倦狂顛　身は杜牧に同じくして　狂顛を倦す
呉歌趙舞幾場興　呉歌　趙舞　幾場にか興る
鳳枕鸞衾随処縁　鳳枕　鸞衾　随処に縁あり
鷗也倦遊思旧宿　鷗や　遊びに倦みて　旧宿を思ひ
一朝飛向九灘川　一朝　飛びて　九灘川に向ふ

君は、富裕な財産をば雲煙にも等しい物と見なして、
大金を投げ出して、青春を謳歌していた。
所は秦淮に比べると、もっと華やかな大江戸深川、
本人は杜牧と同様に遊蕩をほしいままにしていた。
あちこちの遊里で美人の歌舞に興じた事が、どれほどあった事か。
どれほどの佳人と到る処で枕を交わした事か。
今や海鷗君は遊学に疲れて、故郷が懐かしくなり、
ある日、突然、飛び立って九瀬川に帰る事になった。

藤陰は、謹直な人であるのに、詩は無頼の気分を出さねば面白くならぬ、という事を熟知している。その結果、杜牧ばりの風流才子である海鷗の人となりと行状とを、うまく表出し得ている。その上に、艮斎塾の俗士たちに指弾さ

れ放逐された海鷗を庇おう、という気持があって、海鷗の遊蕩無頼を美化しようとする趣きさえ感取できる。藤陰は、才能にあふれた海鷗の遊学が、つまらぬ事で挫折した事が惜しまれてならないのであろう。尾聯には、あんな艮斎塾などは止めてしまえ、と言いたいほどの庇護の気分が込められている、と感ずるのである。

さて鉄心は、驥（めいば）が櫪（かいばおけ）から脱したような思いで江戸を立ち、函根・三保の松原・大井川と東海道を通って、美濃に入ったのは、「正に是れ插秧の天、水田青万頃」（「入郷」『遺稿』四）と、田植えが真っ盛りの頃であった。陰暦五月下旬であろうか。家に帰ると、間もなく江馬細香（七十三歳）が訪れて来た（「細香女史至る。喜びて賦す」『遺稿』四）が、その詩の次には、「雨中に海鷗の居を訪ふ。西溝・立堂・大迂・毛芥・翠羽と同に賦す」が配されており、海鷗の家を訪れた事がわかる。高岡西溝・小野崎立堂・松倉瓦鶏（大迂）・渓毛芥・小寺翠雨などが同行した。前年の十二月に亡くなった母松野氏の位牌に拝するためであろうか。その詩は次のようなものである。

都門酔夢已陳迹　都門の酔夢　已に陳迹
村趣真成情自適　村趣　真成（まこと）に　情自ら適ふ
柳外秧歌人未帰　柳外の秧歌　人未だ帰らず
烟中一道暮江白　烟中の一道　暮江白し

海鷗たちと江戸で酒を飲んで遊んだ事は、もはや旧夢となった。
郷里の村の風景を見ていると、本当に心が安んずる。
柳の向うから田植え歌が聞えて来るが、海鷗君は江戸からまだ帰って来ていない。
帰って来る道を見やると、夕もやの内に九瀬川の一筋の流れが白く浮んでいる。

この詩の直後に、「公の駕の江都より至るを迎へ奉り、恭しく賦す」（『遺稿』四）が置かれているから、右の海鷗居訪問の数日後には、海鷗は藩主戸田氏彬（あきら）の駕に随って帰着したもの、と考えられる。安政六年五・六月の交の事であろう。

その事は、『海鷗遺稿』の「阿母訃音至……」詩の直後に、

「東遊の詩、篇々人をして刮目せしむ。謂はゆる万巻の書を読み万里の路を行く故なるか。旃（これ）を勉めよ。　己未（安政六年）六月初五日雨窓　機妄批」と、後藤松陰の批語がある事によっても保証されよう。海鷗は、六月五日前には帰国していて、折から帰省中の松陰に東遊詩を示し、その批評を頼んでいたのである。

十八　鉄心・雪爪・海鷗の寄せ書き

帰国の後、海鷗は、鉄心の抜擢によって、藩校の教官に任じられ、ついで評定役兼侍講となったと言う（「略伝」）が、その詳しい時日は不明である。

万延元年（一八六〇）は、海鷗は二十五歳であるが、その消息を窺う事のできる資料は、多くはない。

八月十六日、前年の二月に福井藩主松平春嶽の招請に応じて、越前福井の天女山孝顕寺に移住していた鴻雪爪が、行化出錫のついでに大垣に立ち寄ったのであろう、鉄心と禅問答をなし、それを海鷗と江馬金粟とが傍らで観、絶倒した。両者の問答を寄書した一幅という物が小原家に蔵せられているとして、服部空谷著『鴻雪爪翁』二四頁に引かれている。

それは先ず、鉄心が酔後に雲水僧の役割を演じて、

師は月の満つるを期して至り、虧(か)くるに及びて去る。諸(これ)有りや。

と問うと、雪爪老禅が、

心月孤円、光は万象を含む。

と答える。鉄心が声を励まして、

恁麼(かくのごとく)なれば則ち闇昏昏ならん。

と言うと、雪爪が笑って、

一艇手に在り。咄々。

と答える、というものである。そして海鷗が、その幅隅に、

鉄心公、雲水僧の様を做し、雪爪大禅師に向って議論風生、其の音、鐘の如し。傍観の金粟及び余、舌を吐いて絶倒せり。時に庚申中秋後一日なり。師、明日、北発せんとす。

と記している、と言う。江馬金粟は、前にも見えたが、名は桂、字は秋齢、通称は元齢、大垣藩医江馬蘭斎の孫で、細香の姪である。洋学を岡研介に学び、安政三年三月に藩校洋学館の教授となっていた。問答は、鉄心が雪爪の滞在の短さを憤っているのに対して、何やら雪爪がいなしている、という趣きである。傍らに在った海鷗と金粟は、両者の気魄、とりわけ鉄心のそれに驚くばかりであった。

十月十日は、風雪の激しい日であったが、大垣西郊の海鷗の家で詩会が開かれ、渓毛芥（四十三歳）などが集まった。毛芥に、「十月十日、海鷗居の集の席上。是の日、風雪あり」（『毛芥遺稿』万延元年の条）がある。それは、

衝風吹雪昼茫然　衝風　雪を吹き　昼茫然たり

銀箭灑来不可前　銀箭　灑ぎ来りて　前むべからず
赤手吾能搏猛虎　赤手　吾能く　猛虎を搏つ
西郊来上故人筵　西郊　故人の筵に来り上る

強風が雪を吹きつけ、昼でもぼんやりとして見えぬ。
銀の矢のように雪が降りそそぎ、進む事もならない。
私は、素手で猛虎を打ち倒して、
西の郊外にある海鷗君の家の詩席に来り加った。

というものである。転句は、勿論、支那風の雪景色に形象化するための虚構である。これに拠って、海鷗の家でも時として詩会が開かれた事がわかるのである。

十二月二十五日、河野鉄兜が大垣に来った。鉄兜には、万延元年、故郷の播磨から京都・大垣を経て伊勢に赴く旅行の日記『雪鶴日程』三巻があるという事で、今関天彭翁「森春濤」上（『雅友』第三十五号。昭和三十三年二月）は、それに拠って、「小原鉄心が東道となり、全昌寺・江馬細香宅・鉄心の北荘等にて詩会を開いた。春濤は鉄兜の手翰を見て、廿八日、一ノ宮より来り、細香宅・北荘の詩会に列席し、同じく養老の滝を見物し、十二月（ママ）三日、鉄兜と別れた」と記している。『鉄心遺稿』四、万延元年の所に、「河野夢吉と同に桃壺禅師を訪ふ」があり、『毛芥遺稿』万延元年の所にも、「酒間、賦して河野秀野に贈る」「秀野・春濤・大夢と同に松倉蘭馨を訪ふ。卒に賦して以て似す」があって、天彭翁の記述を裏付けている。海鷗側の資料には、この事は見出されないが、鉄兜・春濤という二人の有

名詩人が来訪し、鉄心が東道を勤めた、と言うのでは、彼が詩会その他に参加しない筈がないであろう。鉄心詩は、次のようなものである。

偶延高士叩高僧　偶ま高士を延きて　高僧を叩く
談及時機始上乗　談は時機に及びて　始めて上乗なり
清酌真成情趣遠　清酌　真成(まこと)に　情趣遠し
半霄寒雨滴禅灯　半霄の寒雨　禅灯に滴(したた)る

思いがけなく有名な詩人を案内して高僧を訪れる事となった。
会談というものは時宜を得てこそ、始めて最上のものとなるのだ。
三人で静かに酒を飲んでいると、本当に悠遠な趣きが感じられ、
深夜まで冷たい雨が、灯をともした禅寺に降りそそぐ。

鉄兜は才気煥発、なかなか博学な詩人で、九州遊歴中には咸宜園（広瀬淡窓塾）の社中から「今（頼）山陽」と呼ばれたほどであるが、日光に滞在した時に珍書をも目睹し、仏典にもかなり通じていた（『在臆話記』三・五。万延元年六月八日）。よって、桃壺禅師・鉄心・鉄兜の間には禅学に亘る会話が交わされたもの、と思う。

十九　蘇軾出遊

辛酉文久元年（一八六一）には、鉄心は四十五歳、海鷗は二十六歳である。

正月二十日は、宋の蘇軾が元豊四年（一〇八一）、湖北省麻城の西北の岐亭に友人陳慥を尋ねて行こうとして、黄州の潘丙・古耕道・郭遘に女王城の東禅荘院まで送られ、有名な七律「正月二十日、往岐亭、郡人潘・古・郭三人送余于女王城東禅荘院」を詠じた日であるので、海鷗は、鉄心に陪し、渓毛芥・宇野南邨・耕雲・老泉らとともに梅を牧野・荒尾（共に現大垣市）の諸村に観に行った。その日は少しく雨が降ったので、途中一同は、蘇軾詩の第八句「細雨梅花正断魂」の各字をもって韻となし、それぞれ七首の詩を詠じた。海鷗には、「陪二鉄心大人一、同二毛芥・南邨・耕雲諸兄一、看二梅於牧野村一、時辛酉正月廿日、東坡出遊也。是日、微雨至、各以二細雨梅花正断魂句一為レ韻、各作二小詩一七首」（『海鷗遺稿』）がある。また南村にも、「辛酉正月二十日、観二梅荒尾・牧野諸村一、以二東坡細雨梅花正断魂句一為レ韻、各作二小詩一七首」（『南村遺稿』下）がある。黎祁吟社の社員でもあった南村は、勘定所の属吏、ついで勝手横目に任ぜられ、また厩主簿に転ずるという、小官に安んじ、文職となるのを喜ばない人であったが、小野湖山や大沼枕山からは作家として認められていた。慶應二年四月二十五日、病没。享年五十四。『南村遺稿』二巻があり、その子笙山（達次郎）には『笙山集』一巻（共に明治十四年、大垣、宇野氏蔵梓）がある。

その日、一行は朝早く出発し、夕暮れに帰宅したことは、南村詩第一首の起句に、「軽装朝に城を出づ」とあり、第七首の承句に、「舎に帰れば黄昏を過ぐ」とあるのに拠って知られる。

海鷗の第四首に言う。

渓雨忽催霽　渓雨　忽ち霽を催す
寒林馬影斜　寒林　馬影斜めなり
一輪残日白　一輪　残日白し
照到半邨花　照らし到る　半邨の花

谷川に降っていた小雨が俄かに晴れあがると
寒い林の中に馬の影が斜めに伸びる。
一輪の夕日が輝いて、
村のあちこちの梅を照らし出す。

転句に自注して、「是の日、毛芥上人、馬に跨る」と言い、その事は、鉄心も第三首の結句に「驢に跨り去りて梅を訪ふ」と言う。僧侶の毛芥が馬に乗る事は、よほど珍しかったようだ。その毛芥は、自分の詩が他の人々に劣るのを紛らわそうとして、咄嗟に大声で、「自ら許す渠（かれ）（梅）の知己と、曾て探る月瀬（つきがせ）の梅を」と叫んだので、一同が唖然とした、と追憶している（南村詩の頭評に「尚記、当時、余咄嗟大声曰、自許渠知己、曾探月瀬梅。一行唖然。蓋欲誇於曾遊、以掩其詩陋已」と）。

海鷗詩の第五首は、次のようなものである。

梅花真畏友　梅花は　真に畏友なり
相対益加敬　相対して　益す敬を加ふ
其形雖横斜　其の形は横斜なれども
其心烈而正　其の心は　烈にして正し

梅の花は、本当に畏怖すべき友だ。

向いあうと、ますます敬意が生じる。
枝は林逋が言うように（「山園小梅」）斜めに横たわっているが、
寒中に独り昂然と咲いている心は、猛くして正しい。

この詩には、鉄心の「放翁（陸游）の餘真」という評がある。このようにして海鷗の詩は、七首とも五絶である。彼ばかりか、鉄心や南村の詩も、いずれも五絶なのであるが、この事に関しては、小野湖山に、

正月廿日の坡公の七律の疊韻、大夫（鉄心）は出すに五絶を以てす。亦た腐を化して新と為すの手段なり。

という評がある（『鉄心遺稿』四）。蘇軾詩が七律であるのに対して、五絶を採用した点が新味を出している、と言うのである。この評語は、鉄心のみならず、海鷗や南村の詩にも適用できるものである。

二十　岡鹿門の訪問・書画会

文久元年三月十三日、一宮に森春濤を訪問した岡鹿門が、大槻磐渓の推薦状を持って、次に大垣にやって来た。鹿門は、先ず江馬細香を訪問したが、この年九月四日に七十五歳で亡くなる細香は、「老病トテ逢ハズ」（『在臆話記』三・三）、翌十四日朝、鹿門は鉄心を訪れた。鉄心は、昨年、江戸から帰る途中、彦根の家老岡本黄石のもとに立ち寄って、藩主井伊直弼が桜田門で暗殺された「国変」を慰めた話などをし、翌日の書画会に招待し、更に自著の『改革十則』を鹿門に貸与した。鉄心の宅を辞した鹿門は、その脚で「菱田文蔵（海鷗）ヲ訪フ」。海鷗の艮斎塾放逐の記載は、この時の物である。海鷗は鹿門に、明日の書画会は、鉄心の別荘と海鷗の家との「両家ヲ明ケテ宴席ヲ設」ける事、来

集者は二百餘名である事を話し、「細香近作詩稿」を貸与した。

三月十五日、鹿門は、鉄心が催す書画会に参ずるために海鷗の家に出かけた。海鷗は、満室に「筆硯文房具ヲ備ヘ」、上等席には「鉄心・杏村・（木蘇）大夢・海鷗諸人」が坐っている。杏村は、高橋杏村であろう。ならば、名は九鳴、字は景羽、別に爪雪・塵遠草洞と号し、美濃の安八郡神戸（ごうど）町の人である。明治元年五月に六十四歳で没したから、この時には五十七歳である。中林竹洞の門人である。

隣りの鉄心の別荘には、「盆栽花卉ヲ設ケ、藩人ハ勿論、近郡書画好事家、及ビ白俗ノ書画ヲ請フ者、無慮数百名」という盛況である。雑踏する客に、「券（キッテ）ヲ以テ折詰・酒瓶ヲ給ス」るのだが、それは江戸「両国ノ万八・中村楼ノ雅会」のやり方に倣ったのである。鉄心の揮毫ぶりは、「筆下雲烟、蛟蛇迸出、多々益善、人々ノ望ニ適ス」と、迅速大量に書を生産するのである。海鷗も似たような物であろう。

夕暮れ、客たちが帰ると、鉄心と海鷗は、鹿門と杏村・日野霞山・大夢たちを引きつれ、城門右側の豪邸に到った。流行の医家清水安中の家である。不意を襲ったので、安中は狼狽して出迎えた。鉄心の目論見は、安中の令嬢が三味線をもって新内の新曲を善く演奏するので、これを鹿門たちに聴かせよう、というのである。主人は倉皇として酒店から酒肴を運ばせ、筆墨を用意する。令嬢が沐浴粉粧、衣裳をあらためている間、一同は蘭・菊・梅・竹を描いている。やがて美人が次室から現われ、一礼して、演奏するが、音曲に門外漢の鹿門も、「其ノ高ク品格ヲ占メ、容儀ノ整フタメニ一驚ヲ喫」した。曲が終ると、一座の者は鹿門に詩を求め、鹿門は七絶を賦した。

鉄心は更に、令嬢に蘭の描き方を教えて、「細香女史ノ替人（代替者）」としたいが、そのためには雅号が必要だと、鹿門に雅号を作らせようとする。令嬢が奉書紙を折って捧げ出し、礼拝して請うので、鹿門が名を問うと、「ヲヨウ」と答えた。そこで鹿門は、『詩経』桃夭の篇にちなんで「夭夭女史」と書すると、一座は手を拍って妙とたたえた。

翌三月十六日、鹿門は、大夢と同行して京都に向うのであるが、彼は以上のように『在臆話記』第三集巻三に記して、鉄心の事務処理力と粋人ぶりに感心している。また、譜代列藩の閣老の内、大垣の鉄心を第一とし、長岡藩の河合継之助を比肩する者としている。この詳しい記載によって、鉄心と海鷗たちの大垣における書画会や雅遊の様が如実に窺えるのである。

二十一　松本奎堂

この年の九月十六日、二年後に大和五条で天誅組の変を起して亡くなる松本奎堂が、大垣に鉄心を訪れて来た。鉄心は奎堂の事を、一面識しただけで百年の知己と称せる者、と称揚している（「松本奎堂詩文稿に跋す」『奎堂遺稿』人。明治四年、尾張、永楽屋正兵衛刊）。

奎堂は、世に憤慨する事あって、京都に上ろうとし、途次、鉄心を無何有荘に尋ねた。鉄心は喜んで請じ入れ、酒を用意して語りあう。傍らには大夢と菅竹洲（名は喬。後に『亦奇録』の旅で同行する）がいた。飲めば飲むほど話がはずむ。奎堂は、袖から詩文稿を出して、鉄心の一言を求める。鉄心は、ざっと一覧して、その詩が秀抜雄健で、各体それぞれに、その本色にかなっている事に感心し、奎堂は儒学者としても官吏としても軍師としても役に立つべき人物、と鑑識した。そこで、ともに大酔して、真夜中に散会した。後で聞くと、奎堂は帰り道に橋を渡ろうとして、水中に落ちた。すると大声で、「我れ松本奎堂は、小原鉄心の園に飲みて、このように酔倒しておる。何と愉快じゃ」と叫んだ。従者がこれを輿に助け入れて帰った、という事である。鉄心は、水中に落ちてもなお自分の名を呼んでいた、という事に感激して、「一面にして百年の知と称」せる者、と称揚したのである。

鉄心がこうした文章を書いたのは、翌日の九月十七日の早朝の事であって、前夜の興奮なお覚めやらず、大杯をあおった後に執筆したのである。

後日、明治三年の九月に、鉄心は、

奎堂死せり矣。俯仰今昔の感に堪へず。頃者、名古屋藩の丹羽参事、将に奎堂の文を刻せんとし、予が一言を徴(もと)む。予嘗て其の跋言有り。乃ち出して之を読めば、奎堂の酔態、宛然として目に在り。嗚呼、奎堂をして王綱維新の今日に値(あ)はしめば、則ち其の為す所何如ぞや。因りて憶ふ、詩や文や、同一の心血の注ぐ所、豈軽重を其の間に置かんや。乃ち姑く書して諸(これ)を巻末に置く。

と添え書きしている。奎堂を悼む念にあふれており、その文章と詩とを同様に尊重すべきだ、と言うのである。なお、奎堂と鉄心との出会いに就いては、森銑三翁も「松本奎堂」四（『森銑三著作集』六、三四六頁）に述べられている。

二十二　鉄心の進退

文久元年の初冬（十月）、鉄心に進班の命が下された。また、一事を委任される事もあった。鉄心は、病と称して、これを辞退し、屏居して日を過した。彼の「感を書す并びに引」（『遺稿』五）の引に、

嘉永辛亥（四年）の歳、寛、命を奉じて国家の宿弊を除かんことを議す。爾来、因循して未だ其の功を卒(お)ふる能はず。然り而して連(しき)りに殊恩を叨(みだ)りにし、既に顕栄を極む。今又た進班を辱(かたじけな)くし、且つ一事の委任せらるる者有り。時に寛、病有り、敢て命に応ぜず、屏居して日を渉る。偶ま此の詩在り、実に文久辛酉の冬なり。

と言う。進班とは、具体的に何をいうのか不明であるが、鉄心は、安政二年には、四人いる組頭城代兼役の内、末席

に在ったが、その上位に列せられる、というような事であったろう、と考える。

鉄心が、このような殊恩を辞退した理由は、全二十四句から成る五古「書感」の内の第五句から第八句に至る部分に暗示されている、と考える。それは、

既弄大易理　既に大易の理を弄び
又把楚騒読　又た楚騒を把りて読む
我栄今若許　我が栄今許の若し
可無泥塗辱　泥塗の辱無かるべけんや

というもので、『易経』の中心思想である、盈満を戒める、という教えに従い、『楚辞』離騒の、讒に遭うて貶められた屈原の運命を思い、光栄の絶頂にのぼった者が泥塗に陥れられる危険を慮る、という意を述べている。要するに、一藩の者や、自分よりも上位に在った三人の城代たちの嫉みや反感を避けようとしたのであろう。

そうした考え方は、同じ頃に詠じた作と考えられる「小野崎支離（立堂の字）に答ふ」（『遺稿』五）という七絶にも、明瞭に窺う事ができる。

玉鞭又是策羸駑　玉鞭又た是れ羸駑に策つ
急似奔雷挾雨駆　急なること奔雷の雨を挾みて駆るに似たり
泥濘門前深幾尺　泥濘門前深きこと幾尺ぞ
可堪挙脚上危途　脚を挙げて危途に上るに堪ふべけんや

御主君がまたもやこの疲れた私を引き立てようとして下さる。

その急な事は、雷神が雨を伴って走るようなものだ。
門の前のぬかるみは、深さが何尺ある事か。
足を高くあげて、危険な道を歩いてゆく事に耐えられようか。

この詩が、陥れられる危険のある官途を避けようとする、という考えを詠じたものである事、縷述するまでもあるまい。

こうして鉄心は、この頃、井上士義だとか野村藤陰だとか、いろいろな人々に対して、恩命を辞退した理由を、詩などに拠って婉曲に述べているのであるが、海鷗に寄せた「菱田士瑞に示す」（『遺稿』五）もまた、この頃に作った、ほぼ同様の考え方を詠じた作、と言ってよいであろう。

恩光又及具臣身　恩光 又た及ぶ 具臣の身に
何面揚揚対此民　何の面ありてか 揚揚として 此の民に対せん
官路終無容脚地　官路 終に脚を容るる地無し
尋梅同趁月渓春　梅を尋ねて 同に趁(お)はん 月渓の春を

御主君の恩命が、またもや、ただ員数に入っているだけのこの私に下った。
不才の私が、どの面さげて得意げに領民たちに向いあえようや。
役人の世界には、結局、身を入れる余地が無い。
春になったら君と一緒に月瀬(つきがせ)で梅を見る事にしよう。

二十三　家里松嶠

鉄心が前引の海鷗に示す詩を作った頃、即ち文久元年の十一月頃、家里松嶠が大垣に来った。鉄心に「家里誠懸来りて別れを告ぐ、感を書して之に示す、二首」（『遺稿』五）がある。誠懸は、松嶠の諱である。この来訪に関しては、『在臆話記』四・三に次のように言う。

当春（ママ）、家里松嶠、江州美濃ニ出游、大垣ニ於テ小原鉄心ノ優待ヲ受ク。松嶠ハ松坂人ニテ、斎藤拙堂ノ門ニ学ビ、後ニ聖堂ニ游学、鉄心紹介ヲ以テ拙堂ニ師事、同門友也。鉄心、藩政改革盛名アリ、人物磊落、当世ノ人傑也。松嶠、功成リテ退クハ天ノ道、盛名ノ下、居リ難キヲ以テ其退隠ヲ勧ム。松嶠、喜デ事ヲ論ジ、尋常文人ヲ以テ自ラ居ラズ。輒（やや）モスレバ人事ニ関渉、此レ其禍ヲ取ル所以也。鉄心、ナニカ所感アリケン、断然其子ニ家籍ヲ譲リ、曰ク、余未ダ京摂ヲ見ズ。当夏（ママ）ハ一游、年来ノ俗腸ヲ一洗セント。其時ハ、松嶠ヲ東道主人ト為サント堅ク約束、時月ヲ期シタルニ、鹿門ニモ此事ヲ告ゲヨト。

右文の冒頭に「当春」と言うのは文久二年春を言うが、それは文久元年冬の誤りである。従て末尾に「当夏」とあるのは、正しくは「来夏」となるべきものである。松嶠が人事に関渉して禍を取ったとは、尊王攘夷論を唱えながらも、紀州藩に登用されたりした事が佐幕側と誤解され、文久三年五月二十日、浪士に暗殺された事をいう。鉄心の詩題によって按ずるに、松嶠は、この時、紀州藩関係の用事で江戸に赴く途中、大垣に寄ったものか。鹿門は、松嶠が退隠を勧めたもののように言うが、と言うよりも、前述したように鉄心にはそれ以前から退隠の志があって、それを松嶠に話すと、松嶠も同意した、という事ではなかろうか。

二十四　鉄心の退隠

かくて、鉄心は、松嶠に語った通りに、藩に退隠の願いを出し、藩も一旦はこれを許可して、鉄心の嗣忠迪（二十歳・甥にして鉄心の長女の婿）を家老とした。鉄心に『児迪、年甫めて二十、擢でられて参政の列に加はる。此を賦して示す』（『遺稿』五）がある。

誰料餘栄及汝躬　誰か料らん　餘栄　汝が躬に及ばんとは
好将廉恥矢丹衷　好く廉恥を将て　丹衷に矢へ
到頭密術仍疎術　到頭　密術は仍ほ疎術
至竟無功是有功　至竟　無功は是れ有功
松老千年能傲雪　松老いて　千年　能く雪に傲り
花開三日不堪風　花開きて　三日　風に堪へず
畢生須戒亢龍悔　畢生　須らく戒むべし　亢龍の悔
始已如斯其奈終　始め已に　斯くの如くんば　其れ終りを奈ん

思いきや、私への恩寵がそなたの身にまで及ぼうとは。
そなたは、今後、廉恥を知る事を真心から誓え。
結局、策略をめぐらし過ぎると、抜けた計略と同じになる。

畢竟、特に功績を立てず、普通にやるのが功績というものだ。
地味な松は、年老いても、千年の後、なお雪の重みに耐えられるが、
綺麗な花は、開いても僅か三日間の命で、風に吹き散らされる。
一生、昇りつめた龍は、もう昇る所がなくて後悔する（『易経』乾）、という哲理をもって戒めるべきである。
そなたは、最初からもう、このように昇りつめているのだから、よく〳〵終りを慎まなければいけないぞ。

鉄心は有能な改革者であっただけに、藩内から嫉妬を買う事が多かったであろう。だから忠迪に対しては、特に成功もせず失敗もせず、無難に仕事をこなして目立たない生き方を勧めている。この考え方も、『易経』の、満盈は損を招く、という哲理に基いたものであり、それは鉄心が退隠する事の理由づけにもなっているのである。

二十五　鉄心の東下

かくて、鉄心は、一旦は忠迪に家督を譲って退隠したのであるが、藩は、有能な鉄心の政治力を放棄する事はできず、鉄心はやがて君命に応じて江戸に上る事になった。江戸に到着し、藩主氏彬（あきら）に溜池の上屋敷で謁したのが文久元年十二月八日の事であるから、大垣を立ったのは、十一月・十二月の交であろう。鉄心の五律「召に応じて将に江戸邸に赴んとす、此を賦して諸同人に留別す」（「応召将赴江戸邸、賦此留別諸同人」『遺稿』五）の前半には、「唯だ恩命の厚きに縁（よ）り、病を力めて又た東征す。故友半宵の話、寒灯千里の情」とあり、鉄心は大垣の詩人たちと別杯を交わしてから出発した。

東海道に途を取った鉄心は、大垣より四里、名古屋まで五間の間に在る小越（おこし）に到って、木曽川の水を眺めて、風雪の障害が多い冬の旅の難儀さを思いやり、海鷗に詩を寄せた。たぶん海鷗がこの地まで送って来、別れぎわに海鷗に与えた作であるかもしれぬ。「小越川渡上に感を書し、菱田士瑞に示す」（『遺稿』五）が、それである。

北聳千重万重嶺　北に聳ゆ　千重　万重の嶺
拠鞍征客首頻回　鞍に拠りて　征客　首（かうべ）頻りに回らす
悵然欲問平江水　悵然として　問はんと欲す　平江の水
已歴幾灘蘇峡来　已に幾灘の蘇峡を歴来るやと

北方には高山が幾重にも折りかさなって聳えている。
遠く江戸に行く私は、鞍に跨り、何度も大垣の方を振りかえる。
前途の長さを憂える餘り、今は平らかな木曽川の流れに問うてみたい。
「そなたは、木曽谷の流れがよどむ浅瀬を幾つ越えて来たのか」と。

鉄心は、三河国吉田藩（現、豊橋市）を通っては、藩内に幽閉されている横山（小野）湖山を思い（「過二吉田城一、憶二横山湖山一（湖山時錮于城中）」）、藤枝駅を通過しては石野雲嶺に七絶を贈り（「過二藤枝駅一、賦レ此贈二皆梅園主人雲嶺翁一」）、箱根の難所を越える時には馬子や駕籠舁きの苦労を思いやったりして（「踰二函嶺一、途上与二馬隷一」「同与二舁夫一」）、江戸に到着し、前述した如く、十二月八日に藩主氏彬（あきら）に謁した（「十二月八日、謁二公于溜池邸一、此日設レ醼以慰二臣行路之労一、酔後恭賦二長句一律一紀レ恩」）。

この江戸滞在中に、鉄心は何事か建白する事があったが（「高岡哲夫、命を奉じて大垣に赴く、行に臨んで賦して贈る」の自注に、「予、時に建白有り」と）、それがどのような事かは、『新修大垣市史』通史編一や『小原鉄心伝』にも記載が無く、未詳である。また、この年八月の和宮東下の際に、大垣藩がその行列を警衛・警固したからであろう、十二月に氏彬（あきら）（三十歳）が従四位下に叙せられたので、命令を奉じて松旭図に五絶を題して、祝賀の意を表した（「奉レ教題二松旭図一、時公進二爵四品一、因恭寓二賀意一。公齢甫三十、而有此命、於我公家、蓋異数也。」）。

年末には、大垣の全昌寺（ぜんしょうじ）で歳除の詩宴を張っているであろう小野崎立堂・江馬金粟・渓毛芥と海鷗を思いやって、「歳杪の偶作、立堂・金粟・毛芥・海鷗の諸子に寄す」（『遺稿』五）を作った。

家山韻事近如何　家山の韻事　近ろ如何
沿例禅房餞歳除　例に沿（そ）うて　禅房に歳除を餞するならん
想見寒梅伴僧影　想見す　寒梅　僧影に伴ふを
嗅香半夜読何書　香を嗅ぎて　半夜　何の書をか読む

郷里では近ごろ詩会は、どうなっていますか。
皆さんは、例によって禅寺で歳を送る宴を張られていましょう。
桃壺禅師が寒梅を賞美している姿が想像されます。
あの人は、夜中に香を聞きながら何の本を読んでいるだろうか。

桃壺禅師は、通称は良範。肥前佐賀の人で、雪爪の後を継いで、桃源山全昌寺第二十六世の住職となった。やはり、

鉄心と親交を持った。明治二十年三月九日没。なお、右の承句に拠って、海鷗ら大垣の詩人たちは、毎年歳末に全昌寺で詩会を開き、歳を送るのを恒例としていた事が明らかになる。

二十六　大沼枕山・羽倉簡堂

壬戌文久二年（一八六二）は、海鷗は二十七歳、鉄心は四十六歳である。

江戸藩邸で越年した鉄心は、一月晦日に江戸を立つのであるが、それ以前に大沼枕山と柳橋に遊んだり、羽倉簡堂に謁したりしている。そのいずれが先の事か、俄かには判明しないが、まず枕山との交友の事から書いておこう。この事は、永井荷風の『下谷叢話』にも記載されているからである。枕山は、『鉄心遺稿』五の末に言う。

鉄心君、去年を以て都に出で、今春、偶然に訪はる。余及び磐翁（大槻磐渓）を要して、舟を柳橋に泛ぶ。（西島）秋航も亦た至る。酒を命じて妓を聴へ、劇飲歓すること甚し。将に泝りて上游し梅花を看んとす。君曰く、楽みは極むべからず、請ふ他日を竢たんと。竟に舟を捨てて去れり矣。数日の後、君、其の郷に帰る。頃者、新詩を寄示し、併せて致仕の状を告ぐ。或るひと曰く、君、年未だ五十ならず、急流に勇退せる、蓋し激する所有るかと。余曰く、君は花月の遊賞すら、猶ほ且つ足るを知る。況んや栄禄に於て其の欲に従はんやと。嗟、夫の花月に留連し、功名を顧恋する者、其の賢不肖、果して何如ぞや。今、此の巻を閲するに、間然する所無し。但だ爾の時の游に感有り。故に前説を其の尾に書して、之を還す。

壬戌天貺節（六月六日）　大沼厚敬識

枕山は、鉄心が遊興においてすら「知足」の哲学に則っているのだから、官途において極盛を辞するのも尤もであ

る、と鉄心の出処進退における基本理念を説明しているのである。

鉄心はまた、一月中に、大槻磐渓とともに羽倉簡堂に面会した。鉄心に、「簡堂羽倉公に謁す。大槻磐渓と同に賦す」がある。

半日閑談酒幾巡　半日の閑談 酒幾たびか巡る
羹和鶏骨味殊新　羹は鶏骨を和して 味殊に新し
竟無一語及時事　竟に一語の時事に及ぶもの無し
乃識真成憂国人　乃ち識る 真成に憂国の人なるを

半日ゆっくり話して、酒杯はどれほど巡らされた事か。
汁物には鶏骨（がら）を加えて、味が特別に新鮮だ。
簡堂殿は、全く一言も時事に言及なさらないが、
それでこそ真に国家を憂えているお方だとわかる。

右詩には、「公、頗る割烹に精し。此の日、羹は皆鶏骨を加ふ」との注があるが、簡堂が料理通であった事は、本城問亭撰する所の「羽倉簡堂事略」（『簡堂遺文』〈昭和八年、羽倉信一郎編輯〉、『問亭遺文』五）にも、「平生、摂養を重んじ、飲饌を慎む。因りて味に精し」と言っている。ただし、簡堂が文久二年一月に鉄心に会った事は、『遺文』の「簡堂年譜」にも記されていない。簡堂は、この年の閏八月二十一日、流行の麻疹にかかって没した。享年七十三。

鉄心は江戸を立つに際して、氏彬公から奥州米沢猿引町産の愛馬「猿飛来」を下賜され、「君見ずや洋虜の恃む所は唯だ火軍のみ、毎に長兵を以て功勲を記るを。我一鞭を揚げて直ちに彼を衝き、縦横に蹂躙して胆をして寒からしめん」（「将に江戸を発せんとす、時に公に愛する所の良馬有り、猿飛来と曰ふ、之を寛に賜ふ、恭く長句一篇を賦して恩を記す」）と、相変らずの攘夷思想を詠じた。そして、正月晦日、帰国の途に上り、磐渓・岡本秋暉（画家）・春木南華・上田高痴・圭陰らに品川まで送られ、巌月楼で別杯を交わし、歩を横浜に向けたのである。（「正月晦、発二江戸一、磐渓・秋暉・南華・高痴・圭陰諸子、送到二品川一、遂飲二別巌月楼一」『遺稿』五）。

横浜で洋夷が跋扈する様を具に観察した鉄心は、「横浜雑詩」と題する七絶連作を十首作っている（『遺稿』五）が、それは土地の風俗と人情、とりわけ妓女と「胡児」（洋夷）の親しむ様などを詠じた竹枝体であって、題材の珍しさはあるが、「警策」（いましめる）の意は見出せない（斎藤拙堂評）ものであった。それらの中では次の其三が、比較的に大きな光景を把えた作である。

大舶如鼇錠近湾　大舶　鼇の如く　近湾に錠す
動山砲響胆先寒　山を動かす　砲響　胆先づ寒し
夕陽風急颭章旆　夕陽　風急にして　章旆を颭がす
紅是英夷青仏蘭　紅は是れ　英夷　青は仏蘭

大船が大亀のように近くの湾に碇をおろしている。
山をも揺るがすほどの砲声に、まず胆がちぢむ。
日が傾くと風が強くなって、模様のある旗をそよがすが、

紅いのがイギリスの旗で、青いのがフランスのだ。

かくて大垣に帰った鉄心は、この年の二月、かさねて封事をたてまつり、辞職を乞い、五月一日、これを許された、と言う（『小原鉄心伝』一九七頁）。とは言っても、「胸底に猶ほ存す丹一片、此の心は只だ我公の知る有るのみ」（「重ねて封事を上り辞職を請うて允さる、恭しく長律を賦して以て懐ひを書す」『遺稿』五）と、やがて復職することは、藩主と黙契あるもののようであった。

二十七　福井旅行

文久二年五月六日、鉄心は、家里松嶠に語った通り（二十三）、加賀の山中温泉に病を養うために、堀七兵衛と変名し、海鷗と小寺霞峰とを伴って、大垣を出発した。表向きの目的は山中温泉の坐湯だが、実は福井の孝顕寺に雪爪禅師を訪れるのを楽しみにしているのである。勿論、諸国の情勢を探り、広く人士と交る、という意図も含んでいたであろう。鉄心の「放言并引」詩（『遺稿』六）の引に、

余、近ろ職を辞して将に告を賜はりて加州の山中に坐湯せんとす、偶ま此の詩を賦して自ら小夢窩の壁に題す、実に文久壬戌夏五月なり。

と言う。六日という日付と変名とは、『小原鉄心伝』一九七頁の記述に基く。海鷗と霞峰を伴った事は、後に引く『山長水高図記』の記述に拠る。霞峰は、名は敬忠、通称は直次郎。大垣に生まれたが、幼少時に父母を失い、非常な辛酸を嘗めた。十九歳、大垣に帰り、別勘定所の属吏となり、やがて別勘定奉行に累進し、小扈従隊に列した。明治三

年十一月、大垣藩小属に任ぜられ、出納を司る。十二月、権大属となり、四年十一月、職を辞した。十八年一月二十六日、没。享年七十八。日野霞山上人（美濃江吉良村〈羽島市〉安楽寺住職）に南宗画を学び、『新修大垣市史』通史編一では、南宗画の項に列せられている。『鉄心遺稿』には、福井を経て京都に廻り、六月十四日に大垣に帰るというこの旅の間の部分に、海鷗と霞峰の名が一度も見えないのであるが、それは、この二人を伴っている事は言わずもがなの事なので、わざわざ名を出さないだけの事であろう。少なくとも、海鷗が旅の終りまで随っている事は、後述する京都の部分で明らかになるのである。

鉄心と海鷗・霞峰は、関原・姉川という古戦場を過ぎては感慨に耽り、雨中に賤が岳を望んでは「老猿（豊臣秀吉）早く已に機先を占」めた闘いに悵然とし、越前の柳が瀬関を過ぎる、といった具合に三日間、「峰を踰え又た嶺を越え」（「越に入る」（『鉄心遺稿』六）、盤曲を渉り、ようやく府中に到着して、龍泉寺に満舟禅師を訪問したが、不在であった（「府中竜泉寺、訪二満舟禅師一不レ在」『鉄心遺稿』六）。ついで福井に入り、孝顕寺に雪爪禅師を訪れたのは、五月八日の事であった。そして十日には、城北の丹巌洞において福井藩士が設けた宴に参加するが、その様は、『山高水長図記』上に詳しく記述されているから、それを訓読する。

小原鉄心、劇職を辞し、菱田海鷗・小寺霞峰を従へて、吾が橡栗山房を過る。留歓すること数日、福井藩士、胥謀りて鉄心を丹巌洞に觴す。洞は城北の羽水の涯に在り。余と鉄心と笏渓に沿ひて約に赴く。至れば則ち衆皆在り焉。椅を連ね 橙 を列ね、或いは林間に酒を煖め、或いは松下に茶を煮る。渓上の嵐翠、筆硯盃盤の間に往来す。鉄心、忽ち巨觥を引きて連りに酌み、衆も亦た能く飲む。

長谷部南村（甚平）、勇を好む。酒酣にして鉄心を要して曰く、「聞く、子は膂力有りと。請ふ相撲せん」と。躍身もて 轂觝 し、両雄相降らざる者半時頃、鉄心笑ひて曰く、「止めよ、止めよ、他日、雌雄を兵馬の間に決すれ

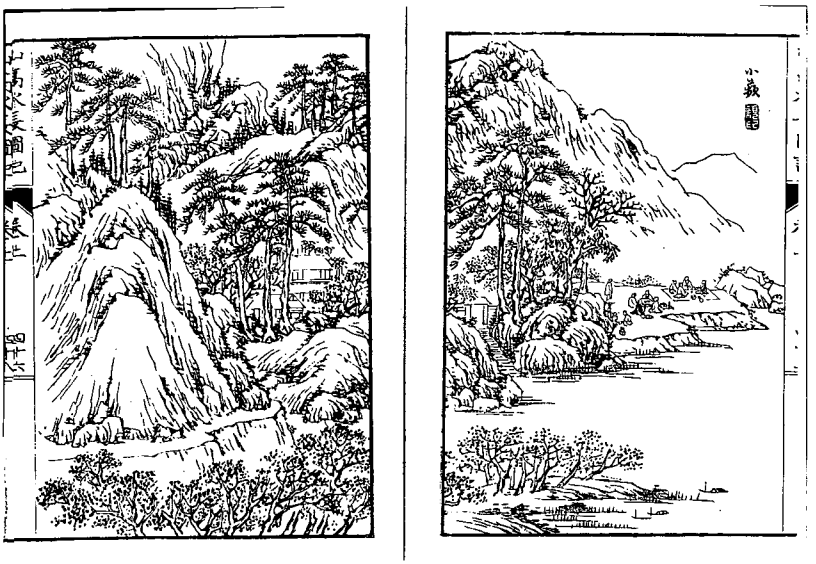
ば可なり」と。乃ち止む。

内藤利兵、鉄心と余と対酌の図を作る。鉄心、其の上に題して曰く、「酔仏印・病東坡、奇癖相許契して他無し。灯を剔り兵を論ず蕭寺の雨、篷を掲げ妓を載す夜堤の花、君見ずや蓍髪の僧・円頂の士、人間に此の好生涯無し」と。興趣更に旺んなり。各の其の言はんと欲する所を言ひ、適甚し。

已にして暮色遠くより来り、松声謖謖として、楽を雲中に奏する者の如し。衆皆歓飲し、酔眸、芋荷を辨ぜざるに至りて散ず。酔歩して夜帰る。一人、芋を誤認して荷と為して曰く、「好箇の蓮池、花時想ふべし」旁らに醒客有り、其の芋畦たるを告ぐ。覚はず絶倒す。

論者有りて曰く、「方今、国家多故、朝武暮文に之れ暇あらず。鉄心、何の暇ありて此の地に漫游するや」と。余曰く、「否。方今、多事、故に以て遊ぶべし焉。夫れ晋の文公、天下を周流し、後に果して為す所有り、顧ふに鉄心も亦た見る所有りて然るか。鉄心、嘗て其の藩の衰弊を慨し、挽回策を建て、以て財政を理む。夷艦の相海に入るに方りて、廃甲論を唱へて、以て兵制を更む。皆実績有り。彼、有為の才を抱く。其の遊固り測るべからず。況んや此の遊ぶべきの時に於るをや。子奚の怪しむことをか之れ為さんや」と。

是の日、会する者数十名、蓋し元和武を偃するの後、藩に制限有り、外藩の士と相往来せざること殆ど三百年、近日、時勢翻瀾し、此の制稍や弛む。然れども互いに胠え猜疑す。心腹を明かして他藩の士を弟兄視する者、此の会より始まる。文久壬戌五月八日なり。



香谷の墨絵
『山高水長図記』上「丹巌松濤」

鉄心と相撲を取った長谷部南村は、福井藩における幕末維新期の人材であり、『明治維新人名辞典』にも登載されている。諱は恕連、通称は甚平、勝手奉行・寺社奉行・町奉行・郡奉行等の要職を経、財政に長じ、賓客横井小楠に共鳴して開国を主張し、進んで洋舶を購入した。文久二年七月、松平慶永が政事総裁職となるや、幕府の無為を悟り、辞職を勧めた。過激なる尊王開国論を唱えて、一時斥けられたが、明治政府からは笠松県知事・岐阜県令に任ぜられた。明治六年十一月十七日没。享年五十六。鉄心の『浴泉遊記』には、「此日長谷部君の話にて、京師近日の事、機密を詳にす」（『小原鉄心伝』一九九頁）とあると言うから、鉄心は、南村の尊王開国論をも聞いたのであろうが、そうとすれば、まさに他藩の士と日本国の重要問題を論じあう先例を開いたのである。

また、大島怡斎も、この日の事を『山高水長図記』の評の部分に記しているので、その訓読を挙げておこう。

当時を回顧するに、余、年二十、亦た席末に陪す。此の日、藩老以下、会する者数十人、裳を掎き襪を連ね、松風澗響の間に觴詠す。南村、酔後に鉄心と角觝し、音吐鐘の如く、眼光雷の若し。其の豪情爽気、今尚ほ目に在り。而るに墓木已に拱せり矣。他の井上松濤・矢島立軒・半井晩香・伊藤君山・鈴木蓼処・蒔田雲処・笠原白翁の如き、亦た皆世を謝す。重ねて高文を誦するに、自ら其の凄黯たるを知らず。

右の記述によって、当日、鉄心や海鷗と会った福井藩士の一部の名が知られる。井上松濤は、安政六年に福井に旅した広瀬旭荘の日記『日間瑣事備忘』十月四日に、「井上剛介なる者来る。曾て聞く、剛介、松濤と号す、福井藩中第一の詩人なり」と見える人である。、矢島立軒は、名は剛、字は毅侯、福井藩校明道館の助教、ついで侍読に任ぜられた人で、安積艮斎の門人である。明治四年十月二十三日没。享年四十六。『立軒存稿』三冊（明治十八年、矢嶋平格出版）がある。半井晩香は、別に南陽と号する人である。名は保、字は伯和、通称は元冲、藩医であり、蘭法を学んだ。明治四年十二月二十八日没。享年六十（松平春嶽著『春嶽遺稿』〈明治三十四年十月、松平家蔵版〉一「半井南陽墓表」）。鈴木蓼処は、名は魯、字は敬玉、明道館句読師であり、明治七年、東京に移住、教部省権大丞に任じられた。明治十年没、四十六歳（笠井助治著『近世藩校に於ける学統学派の研究』上、五三六頁）。蒔田雲処は、名は亮、字は公弼、詩書画を善くし、雪爪禅師と親交を持った。慶応元年（一八六五）夏没、享年五十四（矢島立軒「田雲処伝」『立軒存稿』三）。笠原白翁は、文化六年（一八〇九）、足羽郡深見村に生まれ、町医師であった父竜斎や江戸の磯野公道に漢方医学を学んだ。後、大武了玄に蘭法を学び、御側用人中根雪江の協力を得て福井へ種痘をもたらした町医である（中根雪江先生百年祭事業会編『中根雪江』一六一頁以下）。

二十八　福井滞在

こうして孝顕寺や丹巌洞で雪爪や福井藩士たちと交歓した鉄心と海鷗たちは、やがて舟で三国港に赴くのであるが、その舟中には雪爪・井上松濤・伊藤君山・鈴木蓼所、それに偶ま福井に旅していた詩人遠山雲如が乗っていた。鉄心に「将に福井を発して三国に抵らんとす、舟中、雪爪禅師及び井上松濤・伊藤君山・鈴木蓼所・遠山雲如と同に賦して収字を得たり」（『遺稿』六）がある。雲如は、これより前、雪爪の橡栗山房において鉄心に面会し、「橡栗禅房にて、小原鉄心に値ふ、酒間に賦して贈る（鉄心は美濃の大垣の老たり）」（『雲如先生遺稿』中（明治二十年八月、博愛堂開雕））と題する七律を詠じていた。

鉄心と海鷗・霞峰は、三国には三日間滞在したが、一夜、清風亭の眼前に在る日本海に舟を浮かべた。その遊を、鉄心は『飲夢』其二に次のように記す。

余毎に頼山陽が「天草洋に舶す」の詩を誦して、未だ嘗て其の胸襟の壮なるを想はずんばあらず。壬戌の夏、余、越州の遊を為す。三国港に在ること三日、夜、霞峰・海鷗の二子を従へて、一葦を北海の上に泛ぶ。風断え浪定まり、水は天と相合し、渺々乎として四に際無し。落月を靺鞨の外に指し、明斗を羅刹の辺に望む。二子と相顧み、快を叫ぶこと数ばなり。怒鯨を駆りて飲み、飛仙を挾みて歌ふ。樽は倒れんと欲し、人も亦た酔ひて倒れたり矣。少焉して夢覚むれば、西方正に黒く、舟は繋ぎて清風亭の下に在り。今、此の遊は頼子の天草洋と略ぼ似たり矣。然れども頼子の図南たるや、憂（父春水の死）に丁ること三歳、後、其の餘憂を遣らんと欲し、遂に壮遊を為すのみ。余は則ち塵熱中に在りて、感慨に堪へざる者、二十餘年、一旦職を辞し、始めて北轅を為す。其の興の逸する者、彼に在りや、将た我に在りや。

この舟遊の後に、三人は清風亭に登って、また飲んだのであろう。鉄心に「三国港の清風亭に飲む」（『遺稿』六）がある。清風亭の楼は、「（九頭竜）川尾の海に入る処に当り、南は涯地既に尽き、北は岡觜猶ほ張り、川の広さは四、五町可（ばか）り、而して其の口は逼束すること嚢の如く、僅か二十四、五間、口外は大洋一碧、驚濤天を拍つ」（『日間瑣事備忘』安政六年九月二十四日）と、日本海が眼前にひろがっている所に在る。さればこそ、鉄心の前記した詩は、

海亭斫膾又飛杯　海亭に膾を斫（き）り　又た杯を飛ばす
日落遥空一碧開　日落ちて　遥空　一碧開く
掠面雄風吹不断　面を掠むる雄風　吹きて断えず
直従靺鞨捲濤来　直ちに靺鞨より　濤を捲きて来（きた）る

海べの料亭で刺身を造らせ、また酒を酌み交わす。
夕日の沈む、かなたの空にまで青い海がひろがっている。
強い海風が顔をかすめて、絶え間なく吹き、
靺鞨からそのまま波を巻き寄せて来る。

と、波濤天を拍つ様を雄壮に詠じたものになった。

ついで鉄心と海鷗たちは、永正寺に僧来成を訪れて、僧房で吟酌した（「訪二僧来成一、談次賦示」同）。ここには、やはり広瀬旭荘が安政六年九月二十一日に訪れているが（『日間瑣事備忘』）、来成は旭荘と頻繁に会っている人であった。

鉄心と海鷗たちは、三国には三日間滞在した事は前述したが、その間は紅楼で豪遊していた事が多く、鉄心に「三日紅楼に佽（ほしいまま）に酔遊す」（「将に三国港を発せんとして、此を賦して寿考翁に贈る。翁は福井の市人、蓋し豪家ならん」（同六）という句がある。寿考翁は未詳であるが、三国における鉄心たちの遊興費を支えた人ではなかろうか。なお海鷗は、「北遊中、此の遊を以て第一と為す。而して（飲夢の）九記中、此の篇を以て第一と為す」と、前記の舟遊を最高の遊とする。

ついで鉄心と海鷗たちは、大聖寺（だいしょうじ）に移るが、そこの宿では、竹内珀堂にめぐり会った（「大聖寺の逆旅にて竹内珀堂に邂逅す。別に臨んで賦して示す」同六）。珀堂とは、安政六年九月二十一日に、三国に滞在していた旭荘を訪問した「木屋藤右衛門（字巴一、又珀一堂）」（『日間瑣事備忘』）の事であろう。この人の事は、同書の十月八日の条にも、「初め徹雲、余が為に福井の人竹内布珀に柬す。今日、雪（爪）師、余に柬して曰く、布珀の父は乃ち五兵衛なり。……」と見える。三国で会った珀堂に大聖寺においても遇ったので、右の詩を作ったのであろう。

鉄心と海鷗たちは、さらに大聖寺の東南に在る山中温泉に浴した（「山中温泉に浴し、遂に此の詩を留めて去る」同六）。温泉につかっている間に、鉄心は、「始めて知る我が疾い来源有るを」と、自分の病が厄介な藩政に携わっているストレスに由来する物である事に気がついた。こうした病を治すためには、さし当って、「日（ひび）霊湯に坐して也（ま）た等閑」にしている事が何よりなのである。そして、さらに徹底的に治癒させるためには、「決然として好く遊踪を転じ去り、去り到らん名山佳水の間に」と、人事や酒色を離れて、自然の中に没入することが必要であると悟ったのである。

こうして数日間、湯治していた鉄心と海鷗たちは、難所である竹田嶺を越えて（「踰二竹田嶺一」同六）、再び福井に入り、孝顕寺に宿泊する事になった。そこへ内藤某が、鉄心と雪爪が対酌している様を描いた図を持って来た。鉄心は、戯れに次のような詩を題した（「再抵二福井一、宿二孝顕寺一、時内藤某写下予与二雪爪禅師一対酌図上、持来見レ示、戯題二其上一」同六）。

醉仏印　病東坡　　醉える仏印　病める東坡
奇癖相許契無他　　奇癖　相許し　契りて他無し
剔灯論兵蕭寺雨　　灯を剔り　兵を論ず　蕭寺の雨
掲篷載妓夜堤花　　篷を掲げ　妓を載す　夜堤の花
君不見蓄髪之僧円頂士　　君見ずや　蓄髪の僧　円頂の士
人間無此好生涯　　人間　此の好生涯無し

雪爪は酔っている仏印禅師で、私は病んでいる蘇軾。
お互いに一風異なる性癖を認めあって、他人をいれない程に深く結ばれている。
雨が降って、ひっそりとした寺では、灯心を切りながら軍談をし、
堤に桜が美しく咲いている夜には、篷をかかげて妓女を舟に載せる仲だ。
君は見ないか、髪を蓄えた僧（鉄心）と頭を丸めた侍（雪爪）の姿を。
この世の中にこの二人ほど好い生涯を送っている者は無いのだ。

僧ではありながら松平春岳の諮問にあずかるほどの雪爪と、藩政を握りながらも禅に耽る自分との堅い黙契を詠じた作である。

福井を去る前日くらいであろうか、鉄心と海鷗たちは、朝から午後に及ぶまで山口清香の家に馳走になり、昼寝をした後に辞去した（「訪二山口清香一、朝酌及レ午、遂一睡而去」同六）。山口清香は、『日間瑣事備忘』安政六年十月九

日に「清香来る（清香は、山口小左衛門の号、以下用ふ）」と見えて、福井の町名主である。一同は、この清香の家で「画を展じ詩を評し臥して相語」って過したのである。

福井藩の英明な前藩主松平慶永（春嶽）は、江戸の霊岸島邸で幽閉謹慎している時で、拝謁する機会はなかったが、合計すると三日間ほど福井に滞在した鉄心たちは、藩の国力や人材の豊富さに感心して、五月十八日、福井を立つ事になった。藩士たちの送別の宴に際して鉄心が詠じた古詩が、「将に越を去らんとす、此を賦して福井藩の諸士に留別す」（同六）である。

未入越来先叫快　未だ越に入り来らざるに　先づ快を叫ぶ
五岳聳頂天半掛　五岳　頂を聳かし　天半に掛かる
入越重驚城郭雄　越に入りて　重ねて驚く　城郭の雄なるに
況其文士気如虹　況んや其の文士　気は虹の如きをや
晴嵐亭　丹巌洞　晴嵐亭　丹巌洞
三日高興酔懵懵　三日　高興　酔ひて懵懵たり
勝事堪喜又堪悲　勝事　喜ぶに堪へ　又た悲しむに堪へたり
禅灯今夜照離巵　禅灯　今夜　離巵を照らす

まだ越前に入らない時から、もう素晴らしいと叫んでいた。
五つの高山の頂きが天空に高くそびえていたからだ。
越前に入ってからは、再び城郭が雄大であるのに驚いた。

況んやまして藩の文士たちは、虹のようにきらめく才気を抱いている。

晴嵐亭や丹巌洞など、

三日間、楽しく遊んで、酔って陶然としていた。

楽しい出会いというのは、大層喜ばしいが、また悲しくもある。

今夜のように、禅寺の灯明のもとに別れの杯を交わす事もあるから。

結句を見ると、離宴は孝顕寺で開かれたようである。かくて、雪爪禅師に城外まで送られて、鉄心と海鷗たちは、敦賀に向ったのである（「発二福井一、雪爪禅師、送到二城外一、臨レ別賦贈」同六）。

二十九　敦賀の打它氏

敦賀においては、鉄心と海鷗たちは、敦賀港に在った来青閣で豪商打它（うだ）氏の饗応を受けたようであるが、その謝礼をも兼ねてであろうか、鉄心は、長編古詩「鶴賀港に遊んで来青閣に飲む。偶ま新田氏の事を想ひ、感じて作有り、郷豪打它氏に贈る」（同六）を作った。敦賀打它氏の歴代に就いては、小高敏郎著『近世初期文壇の研究』三五八頁に述べられているが、それに拠れば、この時期の当主は、第十代守宗である。守宗は、先代宗寛の次子で、通称は彦次郎、はじめ弁次郎。明治十一年五月二十六日没、世寿六十六というから、文久二年には五十歳である。彼は気比（けひ）神社中門焼失の際、普請奉行となり、明治三年には、小浜藩権少属に任ぜられた。明治六年十月二日、隠居。鉄心の詩は、『太平記』十七「北国下向勢、凍死の事」、十八「金崎（かねがさき）の城落つる事」等に記された、延元元年（一三三六）十月か

ら翌二年三月にかけて、新田義貞が木の芽峠や金崎城において窮地に立たされた話を詠じた物である。

北地瀕海列港関　北地　海に瀕し　港関を列ぬ
天険殊占敦賀湾　天険　殊に占む　敦賀湾
山勢囲擁如襄括　山勢　囲擁して　襄括の如く
断岸咫尺錠舶連　断岸　咫尺　錠舶連る
来青閣頭来呼快　来青　閣頭　来りて快を叫ぶ
樽有緑醅盤紅膾　樽に緑醅有り　盤に紅膾
談次忽怪心胆慄　談次　忽ち怪む　心胆慄ふを
金崎城址聳在背　金崎　城址　聳えて背に在り
当時老賊擅鴟張　当時　老賊　鴟張を擅にし
天日晦冥殆失光　天日　晦冥　殆ど光を失ふ
勤王幸有新田氏　勤王　幸いに新田氏有り
泣擁龍種赴北方　泣きて龍種を擁して　北方に赴く
木芽嶺上会大雪　木芽　嶺上　大雪に会ひ
兵凍斃者十六七　兵凍えて　斃るる者　十に六七
入城孤守賊如雲　城に入りて　孤守すれば　賊雲の如し
食馬馬尽活路絶　馬を食ひ　馬尽き　活路絶ゆ
欲向蒼旻問是非　蒼旻に向ひて　是非を問はんと欲す

慘毒到此真可哀　慘毒　此に到る　真に哀むべし
倚軒長吟酒欲醒　軒に倚りて　長吟すれば　酒醒めんと欲し
怒濤捲雪天之涯　怒濤　雪を捲く　天の涯
俯仰黙数今古事　俯仰　黙して数ふ　今古の事
否泰有数固其理　否泰　数有るは　固り其の理なり
揭来三百年昇平　揭来　三百年の昇平に
忠義之魂足以慰　忠義の魂　以て慰むるに足る
一笑打肩更挙觥　一笑して　肩を打ち　更に觥を挙ぐ
吾胸忽如雲霧晴　吾が胸　忽ち雲霧の晴るるが如し
大酔醺然重回首　大酔し　醺然として　重ねて首を回らせば
満目海山気色生　満目の海山　気色生ず

北陸の海に臨んで港がつらなっているが、
それらの内でも殊に敦賀湾は地勢がけわしい。
山が海を囲んで、襄を括ったような形をなし、
断崖が間近に迫って、碇泊した船が並んでいる。
私は、ここの来青閣にやって来て、「愉快だ」と叫ぶ。
酒樽には緑色の酒が満ち、皿には刺身が並べられている。

話しているうちに、おかしな事に心胆がふるえてきた。
金が崎城の跡が背後にそびえているからであろう。
その昔、足利尊氏が、ふくろうが翼をひろげたように我がままをほしいままにし、
天皇は蔭に隠れて、ほとんど力を失いなされた。
幸いな事には勤王の士に新田義貞がおり、
悲運に涙しつつ、恒良(つねよし)親王を守護したてまつって、北陸に下った。
ところが、木の芽峠で義貞軍は大雪に降られ、
兵は凍えて死ぬ者が十中、六、七であった。
金崎城に入ってからは、雲のように湧いて来る賊軍を相手に孤軍奮闘し、
食糧が無くなって、馬を食っていたが、すべて食い尽くし、生きのびる術がなくなった。
義貞は蒼天を仰いで、運命是か非か問おうとするが、
その悲惨さは、ここに極って、まことに歎かわしい。
私が欄干にもたれて、暫し詩を詠じていると、酒は醒めそうになり、
はてしなく広がる怒濤は、雪のような波しぶきを揚げる。
伏し仰いで、じっと古今の兵乱を数えあげてゆくと、
不運と幸運とには回り合わせがある事は、もとより真理である。
爾来、三百年間、太平が続き、
義貞の忠義な魂も、慰められるというものだ。

そこで、笑って打它君の肩を打ち、さらに乾杯すると、
私の胸は、たちまち雲霧が晴れたように明るくなる。
すっかり酔い、酒の香りがたちこめる中を、再び振り返って見れば、
見わたす限り海と山には明るい光が生じていた。

足利氏の跳梁を罵り、新田氏の勤王を賞讃する詠史詩であり、鉄心は頼山陽の影響を受けているのであろう。

敦賀を後にした鉄心と海鷗たちは、琵琶湖の西岸に途を取り、湾ごとに白鷗がむらがるのを見、比良山の麓では、陰暦五月のそよ風に送られる田植歌を聞きながら、京都に入った。鉄心の七絶「京に入る」（『遺稿』六）に、「帝王の輦下に始めて脚を容る、一片の幽愁四十年」という句があるが、それは、物心がついてより四十年間、天皇の権勢が衰弱しているのを愁えていた、という意味であろう。即ち、既に勤王に転ずる素地が鉄心には相当あった、と言うことが許されるであろう。

三十　入京

鉄心と海鷗たちが京都に入ると、松嶠は、かねての約束に従って、すぐに書生を鹿門のもとに遣って、この情報を伝えた。鹿門が、その書生と一緒に松嶠の家に行くと、松嶠の妻が応待して、「夫たちは四条の劇場にいます」と言う。で、鹿門が書生とともに劇場に行ってみると、

劇場前ノ茶店側（かたはら）ニ、駕籠モ槍モ其侭ニ差置キ、鉄心、松嶠ト歌妓二、三人ニ扇ヲ以テ煽ガセ出来ル。余（鹿門）

ヲ見テ、「此ノ大暑ニ、此ノ閙熱場ニタマルモノカ」ト。直チニ余ヲ要シテ橋側ノ愛江楼ニ登リ、清流ニ臨ミ、涼風ヲ納レ、流汗淋漓ナレバ、左右ヨリ新衣ヲ被替ヘ、歌妓七八名、絃歌歓酌、談論風生、眼中無レ人、純然江戸調子、真ニ快男子。僕従ノ外ニ、菱田海鷗ヲ従ヒ、（此人、見山楼（艮斎塾）ニ在ル、踊子師匠ノ衣服ヲ作リ、花見ノ浚（さら）ヘヲサセタ、歌舞淋漓、夜ニ入ル、留連トテ放逐。ヨク鉄心ノ気ニ合フ）此日ハ、支峰、天江、画工香谷、暢堂ヲ招キ、絖本揮写。滞京三、四日、諸勝ヲ遍探ノ後、下坂。坂中有名ノ文人ヲ大楼ニ招集、盛宴ヲ張リ、其京ニ還ル。（『在臆話記』四・三）

という有様である。即ち、京都に入るや否や、それまでの田舎の旅の憂さを払うかのように、鉄心と海鷗は、芝居小野に入った。それから、女性を混じえてのドンチャン騒ぎである。海鷗がこの旅行中、ずっと鉄心に付き添っていた事は、ここでようやく証明されるのであるが、その彼が江戸で舞妓に衣服を作ってやった折に、「留連」したとは、これもここで始めて知られる記事である。「愛江楼」とは、後にまた鉄心の詩に出てくるが（三十三）、四条大橋のもとに在る有名な料亭で、文久元年十月十四日、村田香谷と巽太郎を伴って訪れた鹿門は、

四条の愛江楼に飲す。鴨川に面し、眺望絶佳。四壁に、星巌・松陰・（貫名）菘翁の、諸名流の書あり。文人楼と称す。歌妓酒を行（や）り、絃歌興旺（さかん）、曼声曲に和し、曲調絶妙、満坐大いに驚く。

と描写している。支峰（四十歳）は、頼山陽の第二子、酒癖が良くなかった事は、『在臆話記』三・四に詳述されている。ただし、「胸中ハ洒落、一芥帯物ナシ。詩モ文モ大篇大作ハ如何。其序跋短編小作、一種ノ才思風韻アリ。流石ニ山陽ノ子ト評判セシ也」（同書三・十）と、短編に優れた作があるという同時代の評価を紹介している。天江（三十八歳）は、江馬天江、近江出身の蘭医である。その『古詩声譜』（明治十七年刊）は、来舶清人陳明経鴻誥の説を取り入れたもの、と言う（自叙）。画家の村田香谷と前田暢堂については後出箇所で述べる。そして、この時も画家を招いて

書画会を行っているのは、例によって旅費と遊興費を稼ぎ出しているのである。

三十一　浪華・湊川

右の『在臆話記』の引用文の末尾に言う通りに、鉄心と海鷗たちは、嵐山に遊んで蒼翠を愛でた（「遊二嵐山一」『遺稿』六）後、浪華に移り、後藤松陰を訪れて、旧交を暖めた（「抵二浪華一、訪二後藤松陰翁一」『遺稿』六）。後述するように、数日後には、鉄心は道頓堀の六橋楼に浪華の文人と画家たちを集めて宴を開くのであるが、それが書画会を兼ねる事は、第十五で述べた如くである。とすると、この時に鉄心は、大坂在住の松陰に対して、宴と会場の設定と参加人員の招請とを依頼したのであろう、と推測する。

ついで、舟で須磨浦を通過し、近畿の山勢を観察し（「摂西舟中」）、箙（えびら）に花の歌を結び付けた忠度や、夜もすがら笛を吹いていた敦盛、といった平家の公達の最後をしのびながら（「須磨懐古」）、鉄心と海鷗たちは、湊川に到った（「過二湊川一」）。ここまでやって来た目的は、楠正成の墓に謁するに決まっている（「謁二楠公墓一」）。鉄心の詩は、次のようなものである。

貞珉赫赫勒功勲　貞珉　赫赫として　功勲を勒す
稽顙碑前双涙紛　碑前に稽顙して　双涙紛たり
叛服無常皆是賊　叛服　常無きは　皆是れ賊
終始殉国独観君　終始　国に殉ふは　独り君を観るのみ
鄂王墓表西湖土　鄂王の墓は表す　西湖の土

蜀相祠深北嶺雲　蜀相の祠は深し　北嶺の雲
一片忠魂消不尽　一片の忠魂　消え尽きず
江山千載有芳芬　江山　千載に　芳芬有り

石の面には著しい功績が刻み込まれている。
その墓碑の前に額づくと、両の目から涙がはら〳〵と流れる。
裏切ったり服従したりと豹変するのは、いずれも皆、賊軍だが、
楠公だけは終始一貫して南朝に殉じなされた。
楠公の墓は、岳飛の墓が西湖の土地に建立され、
諸葛亮の祠堂が北嶺の雲のあたりに深く構えられているように存在する。
公の忠義なる魂は、消滅する事なく、
ここ湊川の山河に永遠に芳しい薫りを放っておられる。

このように大楠公の墓前において涙し、詠史詩を作る処にも、頼山陽の長編七古「楠河州の墳に謁して作有り」（『山陽詩鈔』一）の影響が見られるであろう。

鉄心と海鷗たちは、湊川から浪華に戻り、諸名流を道頓堀の六橋楼に招いたのが、六月三日（『小原鉄心伝』二〇二頁）の事であった（「再抵二浪華一、招二飲諸名流於道頓堀港六橋楼一、酔後有レ作」同六）。宴に参加した諸名流は、藤沢東畡・後藤松陰・落合双石・渡部誰軒・呉北渚・池内陶所・橋本香坡・内村鱸香・田能村小虎・魚住荊石・田中介

眉・行徳玉江である（右詩題注）。この内、東畩（六十九歳）は、「浪華の徒弟の盛んなる、東畩を推す。城府を設けず、談交諧謔にして、徳行の人たるを害はず。唯だ今時に在りて徂徠学を墨守するは、未だ解事の人たらず」（『在臆話記』三・四。文久元年四月三日）という人物である。松陰（六十六歳）はこの頃、「後藤松陰を訪ふ。老病なるも出でて見ゆ。談更に憒憒（みだれる）たり。松陰、山陽に学び、小竹の女婿、盛名有り。而るに老後頽陶たり。小竹の養子訥堂、無行破産、尋いで卒す。松陰、後事を経紀し、蔵する所の書画文房具、皆人手に帰す。鱸香、小竹の手稿を得て、書肆に謀りて刊行す。篠崎は三世の名家、一物を存せず。松陰、今又た養子を喪ふ。或は其の報ならん」（同書三・四。文久元年三月三十日）という状況であった。陶所は、「池内ハ、学習院教授ナレバ、星巌・三樹諸人、此人ニタヨリテ公卿間ニ声息ヲ通ゼシニ、下獄ノ時、此人、反覆、死罪ヲ免レントシタタメニ、株蔓抄ノ大獄ト為ル。陶所出獄ノ時、長沢雪城、西遊時ノ知人トテ義侠ヲ振ヒ、百事世話西上サセシト云フ」（『在臆話記』三・十）という人物。香坡は、「香坡ハ、上州沼田藩、小竹門下…四天王ト称ス。九州ニ游歴、伊丹ノ豪商、郷校ヲ開ク。ソノ督学トナル。人トナリ磊落、京摂儒流ニ似ズ」（同）という人。鱸香は、「内村、昌平（黌）ニ在ル時ハ与輔ト称ス。雲州松江ノ醸戸。儒ヲ以テ家ヲ興サント欲シ、浪華ニ游ビ、篠崎小竹ノ門ニ学ビ、小竹没ス、東游、聖堂ニ入ル。経学ヲ修メ、細行ヲ慎ミ、尋常一様ノ学問ナルニ、大坂ニテハ後藤俊蔵（松陰）已に病耄、広瀬（旭荘）ハ西帰、其生徒ヲ集メ、門戸ヲ支ヘタル者ハ、藤沢東畩ノ次ニ内村アル位ノ事也。昌平同窓交ナレバ、勢、款待セザルヲ得ザル也」（同三・四）という人。香坡と鱸香は勤皇の人として名高い。小虎・荊石・介眉は画家である。この宴は、「老儒の吻角に玉屑（唾をいう）飛び、画師の腕底に風雨墜つ、酔興殊に覚ゆ日長の月きを、裙釵（妓女）座を圍み笙歌沸く」という鉄心の詩句が暗示するように、書画会を兼ねていたのであるが、鉄心が前もって松陰にその準備をさせていたらしい事は、既に述べた通りである。さればこそ、画家が多いのである。

三十二　京都の画家たち

翌六月四日、浪華を立った鉄心と海鷗たちは、五日、宇治に至って、山陽が命名したという万碧楼に遊びなどし（「万碧楼作（楼在菟道、山陽翁所名）」同六）、再び京に入った。鉄心は、京都でも諸名流を東山の梅尾楼に招いた（「再入レ京、招二飲諸名流於東山梅尾楼一、席上宮原翁有二贈篇一、次レ韻以酬」同六）。梅尾楼とは、第三十節に引いた『在臆話記』四・三の文章の続きに、

吉田屋ノ水楼、即山陽ノ山紫水明荘也。文人ハ、支峰、静逸以下、画工ハ対山、耕石以下、凡都下ノ書家、篆刻、文墨ヲ以テ名ヲ成ス者七八十名ヲ会集、一々挨拶、其意ニ充シメ、絃歌如レ雨。其豪気快挙、一代ヲ圧ス。小藩簿書ニ齷齪、コレデ平生ノ不足ヲ償フトテ、如何ニモ欣然。ソノ発京、余、松嶠ト蹴上マデ出送。芸妓ノ送ル者十数名。…

とあるように、山陽の山紫水明処が、山陽の没後、吉田屋の水楼となったと記している。それが即ち梅尾楼なのであろう。静逸・対山は後述。その宴に参会した人たちが七、八十名であった事は右の記述によって分る。また鉄心の詩題に見える宮原翁とは、宮原節庵のことであろう。節庵（五十七歳）は、名は竜、字は士淵、通称は謙蔵。頼山陽に師事し、のち昌平黌に学び、天保十二年（一八四一）七月、京都御池車屋町に塾を開いていた。後藤松陰と同門であるから、大坂の松陰が京都の節庵に鉄心を紹介して、京儒や画家を集めて書画会を開催するように依頼する等の事があって、この宴が開催されたのであろう、と推測する。このようにして鉄心たちは、浪華・京都の名流に面識を得ると同時に、一方では揮毫料を得ていたのであろう。しかも、その揮毫料を、鉄心は大垣藩に入れていたのである。右

詩の尾聯には、「狂吟大酔して身世を忘る、淹滞して終に十日の遊を為す」とあり、その「十日」という語は、後日、京都滞在が終った時点で更めて填めたものであろうが、浪華に行く以前の滞在日数と併せて十日間近く京都に滞在した事を言うようである。

諸名流との豪華な宴に飽いた鉄心たちは、静逸・百山・香谷といった若者たちを伴って洛北詩仙堂に遊び、さらに足を山鼻の水亭にのばした（「山鼻の水亭に飲む。静逸・百山・香谷と「山中流水有り」の句を分つ、予は水字を得たり」）。山鼻は、修学院村の西、高野川の岸のあたりで、八瀬・大原といった山村に入る口に在る。静逸は、山中静逸（一八二二―八五）であろう。名は献、字は子文、信天翁とも号した。この年、四十一歳。画を善くした。三河国碧海郡東浦村の大地主の家に生まれ、篠崎小竹・齋藤拙堂に学び、安政年中、上京して、梁川星巌・梅田雲浜・頼三樹三郎らと交わる。文久元年四月十二日には聖護院に住んでいて、そこを訪れた鹿門は、「静逸は、参州の豪家、詩を善くし書画に妙なり。都下に開業するは、皆業を售る者なり。唯だ此の人のみ、已に衣食の虞無く、復た其の能を矜色せず、毫も京儒の習気を帯びず」（『在臆話記』三・四）と言っている。香谷は、画家の村田香谷（一八三一―一九一二）であろうか。とすれば、三十三歳。名は蕙。長崎の人で、鉄翁や梅厓などに絵を学んだ。この頃、京都に住んでいた事が、『在臆話記』文久元年十月十四日（第三集十）の条に拠って知られる。

鉄心は勿論、「詩仙堂」（同六）の詩も詠じて、石川丈山の高位高官を泥塗に等しく視る態度を賞賛したが、村田香谷には次のような教戒の詩を与えている（「贈二香谷一」同六）。

自非学力壮胸宇　学力もて胸宇を壮にするに非ざるよりは
争得毫端古気多　争か得ん毫端古気の多きを
成器後来吾望汝　成器後来吾汝に望む

半生蛍雪莫蹉跎　半生の蛍雪　蹉跎たること莫かれ

学問によって胸中を充実させるのでなければ、
どうして画筆に古雅な気分が多く醸し出せようか。
私は君に大器晩成する事を期待している。
今後もずっと蛍雪の功を積んで、つまづかないようにしてくれたまえ。

文人画は、技術よりも気韻生動を尊ぶので、書巻の気を必要とする、と言うのが『芥子園画伝』以来の伝統的画論であり、鉄心もそれを説いているのである。この詩に就いては藤井竹外の評があり、「僕も亦た意を此の人に属す。英雄の見る所、符節を合するが若し。呵々」と言う。竹外も、香谷と面識があったのであるが、その事は、文久元年十月十五日、竹外の南禅寺の詩会に香谷が参加している（『在臆話記』三・十）事等に拠って確認できる。

鉄心は、なおも日根対山・前田暢堂といった画家と知りあい、それぞれ「対山を訪ふ、酒間賦して贈る」「木塵尾払歌、前田暢堂の為にす（払は丈山先生の故物に係る、今暢堂の有たり）」（同六）という詩を詠じている。対山は、名は誠、また盛長、字は成之、この頃は両替町御池南に住んでいた（嘉永五年刊『平安人物誌』）。鉄心詩の転結句に「相逢ふて未だ語らざるに酒先づ置く、後圃の摘瓜新たに塩を下す」とあり、客が座に坐るや否や、挨拶も抜きで、まず酒を出し、裏の畑からつんで来た瓜に塩を掛けて下物とするのが、日根家の習いであったらしい。これまた竹外の評に、「此は是れ対山の家常なり」と言う。例の『在臆話記』四・一には、対山について、「日根対山盛名アリ。此人ノ妻ハ、頼支峰ノ妻ト兄弟。対山酒癖、支峰ト好一対、嵇・阮ノ流。陽明家、三郎公（島津久光）ヲ饗応ノ席、揮毫、傲然挙動。又、（斎藤）拙堂ヲ酒席ニ嘲

弄セシ等、尋常画工ニ非ズ」と言う。『世説新語』任誕に描かれる、嵇康・阮籍同様の無頼派だ、と言うのである。

前田暢堂は、名は碩、字は実甫。阿波半田の人。山本梅逸の門人で、室町高辻北に住んでいた（嘉永五年刊『平安人物誌』）。木塵尾払は、塵（しゅ）（大形の鹿）の尾で造った払子（ほっす）で、柄が木製の物をいおうが、暢堂に贈った右の詩は、丈山の払子が天造自然で、人巧を尽くした物でなく、暢堂は丈山の人となりを敬愛する餘りにそれを入手したのであり、茶人の陥りがちな玩物喪志の弊からではない、と詠った作である。以上の、静逸・百山・香谷・対山・暢堂は、いずれも画家であり、彼らとは東山の栂尾楼で開かれた宴会（書画会）の折に知りあった事は、既に述べた。

三十三　松井耕雪

京都滞在も終りに近づいた頃、鉄心は、松井耕雪（四十四歳）に逢う事があった。耕雪は、越前府中（南条郡府中町）の人であり、称は六右衛門。代々、打刃物を業とする豪商であり、学芸を好む蔵書家である。安政六年六月十九日には、府中に来った広瀬旭荘を宿に訪れて、束脩を行っている（『日間瑣事備忘』）。私財三百両を福井藩に献上して藩校立教館を設け、産業開発に意を用い、万延元年、府中製産役所を興し、蚊帳・打刃物の輸出に尽し、更に横井小楠・由利公正らと殖産興業を計るなどした国士である。維新後は、敦賀県権大属となった。鉄心は、こうした傑物と逢いはしたが、それは顔をあわせたぐらいの事で、心事を語りあうまでには至らなかった。しかし、福井までは四里、鯖江までは一里の間に在る府中の、耕雪の庭園である逍遥園には一ヶ月前に立ち寄っていたので、初対面を機として、

「贈二逍遥主人松井耕雪一（越前府中人）」（同六）を作った。

遊越過君園　越に遊びて　君の園に過（よぎ）り

来京始逢君　京に来りて　始めて君に逢ふ
相逢只一面　相逢ふも　只だ一面のみ
未及話心肝　未だ心肝を話すに及ばず
預識園中趣　預(かね)て識る　園中の趣を
瀟洒若其人　瀟洒たること　其の人の若し
我初過園時　我初めて　園を過ぐる時
斜月照松関　斜月　松関を照らす
隔籬認鏡面　籬を隔てて　鏡面を認め
中有老竜蟠　中に老竜の　蟠(わだかま)る有り
翼然何物欹　翼然として　何物か　欹(そばだ)つ
鳴琴細細聞　鳴琴　細細として聞ゆ
欲就而窺之　就きて之を窺はんと欲するも
低徊意未馴　低徊　意ふに未だ馴れざることを
亭俯清池上　亭は俯す　清池の上
泉迸層嵓間　泉は迸(はし)る　層嵓の間
左折得小橋　左折すれば　小橋を得たり
古逕排葦前　古逕　葦を排して前む
有丘宜遠眺　丘有り　宜しく遠眺すべし

山影淡於烟　山影　烟より淡し
樹間灯幾点　樹間　灯　幾点ぞ
穿靄熒熒然　靄を穿ちて　熒熒然たり
入林又出林　林に入り　又た林を出で
高燭紅照筵　高燭　紅いに　筵を照らす
園丁代主出　園丁　主に代りて出で
延予坐青氈　予を延きて　青氈に坐せしむ
寒暄丁寧語　寒暄　丁寧に語り
呼僮茶一煎　僮を呼びて　茶一煎す
我視結構巧　我　結構の巧みなるを視
抱感重倚欄　感を抱きて　重ねて欄に倚る
已具幽邃致　已に幽邃の致を具へ
加之楼閣新　之に加ふるに　楼閣新たなり
主人胸底秘　主人　胸底の秘
于斯宜洞観　斯に于いて　宜しく洞観すべし
但能慕隠操　但だ能く隠操を慕ふのみ
不屑為隠淪　隠淪と為るを　屑（いさぎよ）しとせず
此訣我同調　此の訣　我　同調し

思之夢相牽　之を思ひて　夢に相牽く
他年再会日　他年　再会の日
此意仔細論　此の意　仔細に論ぜん
持論之相合　持論の相合ふこと
有如貫的丸　的(まと)を貫く丸の如きもの有らん

越前に遊んだ時に、貴殿の庭園に立ち寄り、
京都にやって来て、初めて貴殿と会った。
会いはしたが、ただ顔をあわせただけで、
まだ心事を語るには至らない。
以前から庭園の様子は見知っておりましたが、
その洗練された様は、貴殿の人となりのようです。
私が当初、庭園に来た時、
傾いた月が松の門を照らしていた。
垣根ごしに鏡のように光る池を見出したが、
その内には老竜がとぐろを巻いていると思われた。
翼をひろげたように何物かが斜めに立っていて、
琴の音がかすかに聞えてきた。

立ち寄って、中の様子を探ろうとしたが、
まだ近づきでないことを考慮して、往きつ戻りつした。
清らかな池のほとりに亭がせり出しており、
幾重にも畳まれた岩の間に泉が流れている。
左に折れると、小さな橋があり、
古い道を葦を押し分けて進む。
丘があって、眺めわたすに打ってつけであり、
山の姿がもやよりもうっすらと見える。
樹の間に幾つかの灯が見え、
かすみを通してきら〳〵と輝いている。
林の中に入り、また林から出ると、
燭が高く掲げられて、紅い光がむしろを照らしている。
園丁が主人に代って出て来て、
私を案内して青毛氈に坐らせた。
時候の挨拶を丁寧に述べ、
下僕を呼んで茶を立てさせる。
私は庭園の構成が巧みなのを見て、
感心しながら、再び手すりにもたれかかる。

奥深い趣きを備えている上に、
さらにまた御殿は新しい。
庭園の主の胸中に秘められた考えが、
この時に見抜けよう。
それは、隠者の節操は慕うけれども、
隠者となることは良しとしない、というもの。
私は、こうした秘訣に同意し、
主人の事を思い続けて、夢にまで見るほどだ。
後年、また会う事ができたならば、
こうした思いを詳細に論じあいましょう。
きっと、二人の持論が一致することは、
弾丸が的を射当てるようでありましょう。

右に詠われた逍遥園は、旭荘も安政六年六月二十八日に訪れていて、その模様を『日間瑣事備忘』に詳細に述べている。それは先ず、

門に入れば豁然として広し。北隅の一舎は、蓋し園丁の居る所ならん。其の西に圃数畝有り、其の東に池有り、東西二丈、南北七八町可(ばか)り、清くして且つ深く、群魚浮沈す。池の北の一舎は、半ばは池上に臨む。焉(これ)に入る。耕雪見えて曰く、此の園の総名は逍遥園なり、十二勝を定めんと欲す、撰を請ふと。

と、庭園の概要を描写する文章から始まるのだが、園丁がいる事、清らかな池がある事、一舎の半ばが池の上に突き

出している事など、鉄心の詩に詠ぜられている事と一致する点が多い。旭荘の記録に拠って、鉄心詩が実景を描写している事が確認できるのである。

耕雪が旭荘に逍遥園十二勝の撰定を乞うたのに応じて、旭荘が柳渚・望遠処などと撰定命名してゆく様は、もはや割愛するが、一つだけ逍遥園という名の由来を記している事だけは、紹介しておこう。すなわち、享保十六年（一七三一）正月吉日に百十六歳（！）の一井鳳梧（松江の人。林羅山の門人で、浪華で最初の漢学者）が書いた横幅が壁に掛けられており、それには「答問寿者」（「寿を問ふ者に答ふ」）という詩が揮毫されている。その詩は、

長寿古来人所欲　長寿は　古来　人の欲する所
朱顔不改百餘春　朱顔　改まざること　百餘春
此非丹薬延遐算　此れ　丹薬もて遐算を延くに非ず
間歩逍遥養性真　間歩　逍遥して　性の真を養へばなり

長寿は昔から人が願うもの、
私の若やいだ顔が衰えないのは百餘年、
それは仙薬でもって寿命を長びかせたのではない。
ゆったりと散歩し、自由な境地に遊ぶ事によって、本来備わっていた生命力を養ったからだ。

というもの。この『荘子』逍遥遊篇の思想を体現する事を詠じた詩の幅を近ごろ耕雪が入手したので、逍遥園という名が付けられたのだ、と旭荘は記している。

鉄心がそうした事情を知っていたか否かは分明でないが、それよりも鉄心の関心は、耕雪が世俗を避けて風雅世界に逍遥する趣きを十二分に解しながら、しかしそうした境地に埋没せず、俗世に参加して殖産興業によって俗世を改良しようとしている所に在った。そのように風雅世界に閑適しつつも、他方で現実世界に関って、経世済民の儒学的理想を世に施すのが鉄心の理想であった。この頃の彼は、体調不良で現役を退き、旅行によって鋭気を養っていたのであるが、体調が回復すれば、再び現実世界に打って出ようと期していたのであり、そのような意欲が耕雪と実際に会う事によって、また頭を擡げていったのではなかろうか。

『鉄心遺稿』六では、右の逍遥園詩の直後には「鴨河雑詩十首」が配され、それは鉄心と海鷗たちが鴨川畔の酒楼に流連していた事を想わしめる艶体詩の連作であるが、その第七首の起承二句には、「冷炙　残杯　燭影青し、詩を思ふ人は愛江亭に在り」とある。この愛江亭については、第三十節に述べた。

第三十二節で引いた『在臆話記』の文章の末尾にあったように、鉄心と海鷗たちは、鹿門と松嶠、それに十数名の芸妓に蹴上（けあげ）（日向神社の石鳥居前より東へ二百メートル、国道一号線の北側にあったと言う。角川文庫『都名所図会』上・二九六頁、竹村俊則氏注五）まで送られて、京都を立った。『在臆話記』では、その後、越前福井の孝顕寺に向ったと記しているが、それは誤りである。そして続いて、

抑（そもそも）、此長・薩、擾々紛々タルニ、断然藩宰ノ劇職ヲ脱履、此ノ京摂游ヲ挙ゲタルハ、必別ニ所レ見アリテ此ニ出デタルト外思ハレズ。松嶠ノ如キ、後（ママ。彼か）ノ服掌中ニ在リテ不二自知一モノ。此豪游投ズル所、恐ラクハ三、四千金ニ下ラザラン。

と記しているが、それは、家老職を辞して自由になった鉄心が、その自由になった境涯を利用して、京阪の政治的情報を探ったのだ、と言っているのである。確かに鉄心たちの旅行には、単に保養と資金獲得のみならず、尊皇攘夷論

が鬩ぎあう京都において朝廷・幕府・諸藩の動静などを探る、という目的が潜められていた、と考える事ができよう。まだ若い家里松嶠などは、鉄心に操られたのだ、と鹿門は評しているのである。

かくて、六月十日夜（『小原鉄心伝』二〇三頁）、鉄心と海鷗たちは近江の石山寺に遊び（「石山寺」同六）、紫式部の古をしのんだ後に、大垣を目指したのである。

三十四　岡本黄石

それより彦根に出た鉄心と海鷗たちは、彦根藩の家老にして優れた詩人である岡本黄石（五十二歳）の家を訪れ、その濠梁園に遊んだ（「黄石岡本君の濠梁園に遊ぶ。君、詩有りて示さる、韻に次し却贈す」同六）。黄石が、藩主井伊大老暗殺（万延元年三月）直後の彦根藩の憤激を鎮めるのに功あった事、諸藩の家老中の「鶏群の一鶴」である事は、勝海舟の『氷川清話』に語られている。従って、同じく諸藩の家老中の鶏群の一鶴である鉄心と、様々の時事問題上の意見を交換しそうな事は、当然に想像されるのであるが、両者の詩を読む限りでは、そのような俗事は避けて、もっぱら風雅世界に没入しよう、という意を述べるばかりである。たとえば、鉄心詩は、

匹似山林杜老遊　匹似す　山林の　杜老の遊に
風潭半日弄清流　風潭　半日　清流を弄す
濠梁并得輞川趣　濠梁　并せ得たり　輞川の趣
明月照臨杯酒頭　明月　照臨す　杯酒の頭に

半日ほど、そよ風が吹く清らかな流れの淵で水を眺めていたが、
それは、杜甫殿が山林で風雅に遊んだ事とよく似ている。
この庭園の趣は、『荘子』秋水篇の濠梁と王維の輞川の別荘のそれとを併せ備えており、
明月が杯の酒の表に映っている。

というものである。

鉄心詩が黄石の詩に次韻したものである事は、題に言う通りであるが、黄石の詩集である『黄石斎集』第一集（明治十三年、華頂山房刊）下に収まる「小原鉄心と濠梁園に游ぶ」は、康戌嘉永三年（一八五〇）のあたりに配されていて、文久二年の作とするには躊躇される。ただし、第一集には、鉄心の名が詩題に見える作はこれしか無く、且つ「游」「流」「頭」という平声尤韻を同じくするので、文久二年の作が嘉永三年の所に混入した可能性も考えられる。あるいはまた、嘉永三年に鉄心が濠梁園を訪れた事があって、右の韻を用いて詩を詠じたので、文久二年の此の度も同一の韻を用いて作詩したのであるが、この年の作品は集に登載されなかった、とも考えられる。という訳で、鉄心詩に対応する作と直ちに断定する事はできないのであるが、鉄心と黄石との交友ぶりを窺うには好適であるので、黄石の右の詩をも挙げておこう。

可比当年荘恵游　比すべし　当年　荘恵の游に
与君半日俯清流　君と半日　清流に俯す
世間無限駭機事　世間　限り無き　駭機の事
不到逍遥濠濮頭　到らず　逍遥せる　濠濮の頭（ほとり）に

小原君と半日間、清らかな流れを見ていたのは、
その昔、荘周と恵施とが水のほとりで遊んだ事になぞらえられる。
世の中には限りなく驚くべき変事が生ずるが、
我々がゆったり遊んでいる濠濮のあたりには到らない

と、これまた俗事に相渉らない姿勢を表わしている。大沼枕山は右詩を評して、

鉄心の飲は巨觥を要し、君の飲は蕉葉に在り。鉄心の詩は豪放、君の詩は精警、其の人の異なる、多く是に類す。而して交情は荘・恵の如し。実に奇と謂ふべし。

と言っているが、両者が豪飲、水流を眺めつつ交わす話題が、一も激動する文久年間の時事に及ばなかったとは、俄かには信じられない。勤皇か佐幕か、攘夷か開国か、そうした相反する潮流のいずれに藩を導いてゆくべきか、を廻って意見交換する事があった、と想像されるのであるが、両者は、それだからこそ却って現実世界の煩憂を忘れるのだ、と言うのである。鉄心が逸早く高島砲術や西洋軍学を取り入れて大垣藩の兵制を改革したのに対して、黄石はひたすら旧套を墨守して、西洋風の長州兵に敗れた事が『氷川清話』に述べられているが、とすれば、黄石は、鉄心の兵制改革の話などを全く聞かなかったのであろうか。

ともかくも、黄石と半日の閑遊を過した鉄心は、彦根を立つと、そこから一里ほど東に在る中山道の難所、磨針峠（すりばり）で馬上に頭を廻らして黄石に懐いを寄せながら（「小店駅門に痩馬に騎り、磨針（すりばり）山下に独り頭を回らす」。「別後前韻を畳みて、黄石君を寄懐す」の転結句）、帰途に就いたのであった。

かくて、六月十四日、大垣に到着して、鉄心と海鷗たちは、三十八日間に亘る長旅を終えたのであったが、それに際しての鉄心の感慨は、「帰家の後に作有り」（同六）に表わされている。

始知心累遂難消　始めて知る 心累 遂に消え難きを
百事人間自所招　百事 人間 自ら招く所
憶昨思家労客夢　憶ふ昨 家を思ひて 客夢を労せしを
帰家夢客亦宵宵　家に帰れば 客を夢む 亦た宵々

やっと分った、この心労というものは最後まで消えにくいという事が。
この世の万事は、自分自身が招き寄せるのだ。
思い起せば、昨日までは家が恋しくて、旅中によく夢を見ていたが、
家に帰ってみると、今度は毎晩、旅の夢を見ることだ。

この詩境を藤井竹外は、「前人未だ道破せず」と評している。

以上の遊歴から鉄心と海鷗が得たものは、詩心を涵養して詩境をひろげる等、様々にあったであろうが、何よりも重要なものは、北越の雄藩福井藩や京阪、中んづく勤皇・佐幕の両派渦巻く京都に滞在し、幾多の人材と知りあう事によって、天下の趨勢を感じ取り、後年に大垣藩を勤皇論に統一させるようになるための思想的基盤を脳の深い所に浸み込ませた事であろう。いわば、この長旅は、鉄心と海鷗が佐幕論から勤皇論に転換するための素地を醸成した、と考えるのである。こうした素地が無かったならば、慶應四年一月のあの素早い思想的転換―それは政治的転換でも

ある―は行われなかったろう、と思うのである。

三十五　小野湖山

文久二年十月、鉄心は原職（城代家老）に復した。『鉄心遺稿』の原稿中には、「寛、文久壬戌（二年）の春、病を以て辞職し、同年冬、復職の命を再拝す」という題を記したものがあったが、詩の方は無くなっている、遍く捜索したが見つからなかったので、詩題のみを表出し、鉄心の出処進退を明らかにすると同時に、詩の配列順序を定めておく、と『鉄心遺稿』の校訂者小野湖山は次に引く詩の上欄に述べている。

次に引く詩とは、文久三年（一八六三）、鉄心が四十七歳（海鷗は二十八歳）の年、一月に江戸に赴いたが、同月十六日には参河吉田に寄って、折しもその日に、五年に亘る幽閉から釈放された湖山（五十歳）と面会した際の作である（「東役の路次、湖山老契を吉田駅に訪ふ、酒間に賦して贈る、時に癸亥上元後の一日なり」同六）。

期君優命有今日　期す君の優命 今日有るを
今日何期恰相尋　今日 何ぞ期せん 恰かも相尋ぬるとは
廿歳交情無冷暖　廿歳の交情 冷暖無し
半生世路幾昇沈　半生の世路 幾たびか昇沈する
灯青楼上酔餘話　灯は青し 楼上 酔餘の話
月白橋頭別後吟　月は白し 橋頭 別後の吟
多難真成見高節　多難 真成に（まこと） 高節を見る

英風千古最堪欽　英風 千古 最も欽(つつし)むに堪へたり

私は吉田侯の釈放の恩命が今日に下る事を期待していたが、
その今日に丁度、貴殿を訪問するとは予期してもいなかった。
貴兄と二十年間交際してきたが、友情は変る事なく、
貴兄の五十年の人生には、幾度浮沈があった事でしょうか。
二階で、酒さめて後も灯火をともして話しこみ、
月光に照らされた橋のあたりで別れた後も、私は、貴兄の事を詩に詠ずるでありましょう。
幾多の災難を通じて貴兄の崇高な節操が貫かれている事がよく分り、
その秀でた風格は永遠に敬仰するに値します。

右詩には、「湖山、城中に錮せらるること五年、此の日、宥を得たり。詩中故に云ふ」という自注がある。湖山が安政五年五月二十一日、藩主松平信古(ひさ)の遠謀深慮によって、藩から大獄の犠牲者が出るのを避けるために、国元長押込(ながおしこめ)の処分に会った事情は、今関天彭翁「小野湖山」下（『雅友』第四十五号。昭和三十五年二月）に詳しいが、釈放の日がこの年の一月十六日であった事は、鉄心のこの自注によって始めて知られるのではなかろうか。それはともかく、鉄心が、外夷の脅威を防ごうという湖山の国防思想とその活動とを高く評価していた事は、右詩に明瞭に表わされている。

また、鉄心と湖山との交友がほぼ二十年前（天保十四年頃）に始まった事、大獄が行われて湖山が幕府の嫌疑を得、

交遊甚だ稀になった時、鉄心だけは陰に湖山を保護した事は、湖山の「刻鉄心遺稿序」に、

往年、余の麹坊（江戸麹町）に寓するや、君（鉄心）酒を携へて過らる。一見して旧相識の如し。爾後或いは咫尺相来往し、或いは東西に離居し、音書往復、曾て虚月無し。余が性、粗率簡直、時に或いは酒を被り、大言もて座を罵る。而も君は咎めざるなり。時に或いは微過を指摘して、迫促切劘、而るに君は拒まざるなり。癸丑（嘉永六）・甲寅（安政元）の際に当りて、天下多故、余自ら量らず、動もすれば輙ち国事を抗論し、人皆咲ひて以て狂と為す。而るに君のみ独り之を非とせず。後に災厄に罹るに及べば、則ち君陰かに力を出して救解するも、而も陽に知らざるが如し焉。余常に以て良友の復たは得難きものと為す。…（明治五年十月）

とある通りである。湖山は、右のような親交を持ち恩義を受けたが故に、後年、鉄心の息雎陽の依嘱を入れて、『鉄心遺稿』の校訂・編次に務めたのである。

（とくだ・たけし　法学部教授）